



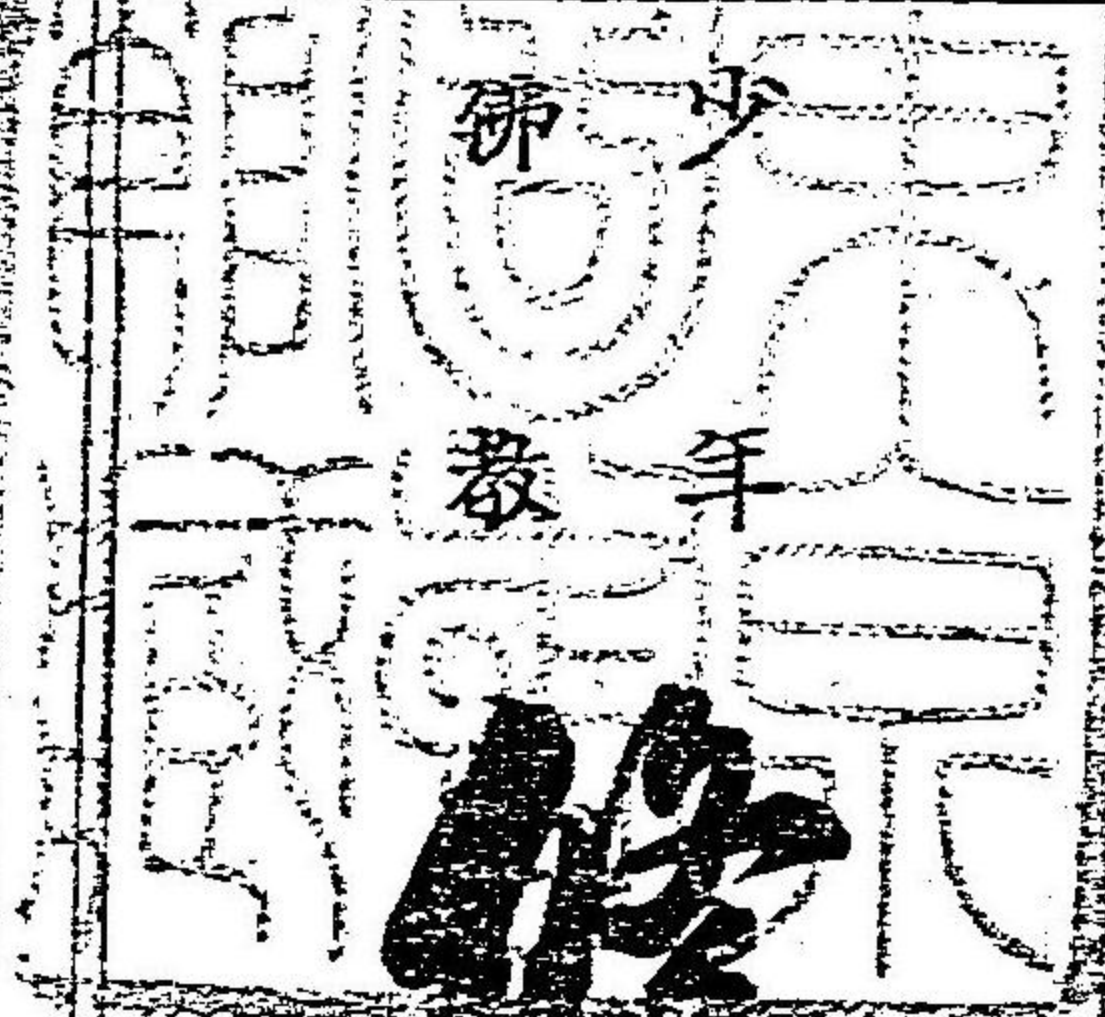
紳士の年  
修身の家  
顯道(名院)生殿



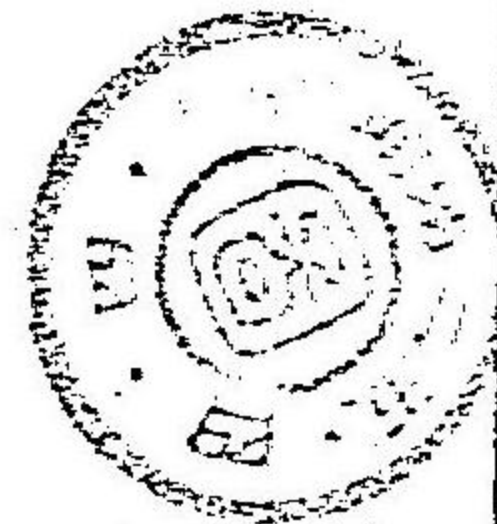
特21  
353

利井老和尚讚  
無田淵海口演

修身正法



京都・顯道書院藏





美ら女

おんなのこ

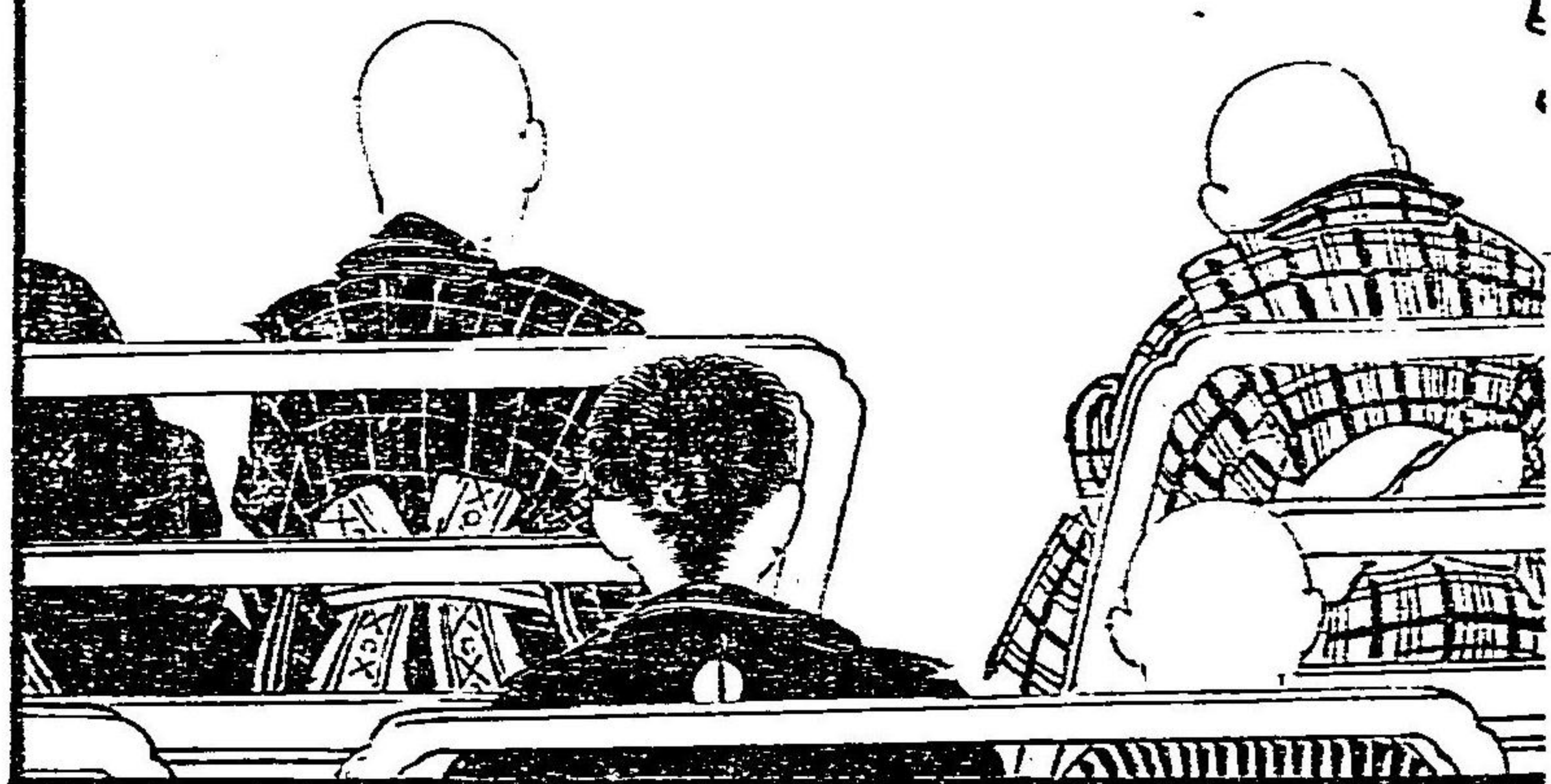
あまのこ

うらな

うらな



開會主旨  
嵐會議ノ話  
鳥下獸下戦上話





ぬらぬら

てはたぬら

とす

杵や〜娘

〜

本書ノ由來

近頃顯道子毎々罷り出デ。八釜敷述  
 へ立テ、申ス様。當時我佛教社會ニ  
 於テモ。印刷事業甚ダ盛ンニシテ。隨  
 分廣ク行キ涉リタレドモ。未ダ少年  
 輩ニ適當ナル修身話シノ書册ナシ。  
 是レ實ニ遺憾ノ極ナリ。彼レ少年輩



ニ於ケル家庭教育ノ必要ナルコト  
ハ。万国ノ教育諸大家ガ夙ニ唱導セ  
ラル、ニモ拘ワラズ。我佛敎家諸先  
生ノ此處ニ着眼セラレザルハ如何  
ニモ不審千万ノコト。先生  
若シ餘暇アラバ幸ニ御起稿被下度  
ト。然レトモ予ハ元來筆仕事ハ不得

手ノ方ノ事ナレバ容易ニ顯道子ノ  
需メニ應ズルコト能ハザルニヨリ。  
之ヲ辭スルコト再三ナリシモ。顯道  
子遂ニ聞カズ。予此處ニ於テ。一策ヲ  
案ンシ出シ。語テ曰。子若シ餘暇アラ  
ハ。予ガ少年教會ニ於ケル。毎月二度  
ノ演説ヲ筆記シ。以テ一小冊子トナ



(一目) 少年佛教修身なま

少年佛教修身なま

目録

- 鼠會議の話……………一丁
- 猫と鼠の話……………四丁
- 病める小鼠の話……………七丁
- 鳶か猫に欺されたる話……………九丁
- 蟹と蟻の話……………十二丁
- 遷佛會れ牛の話……………十三丁
- 鳥と獸との戦ひ話……………十六丁
- 狼と羊の話……………十九丁
- 蚤と虱の話……………二十二丁

セト顯道子欣然トシテ辭シ去レリ。  
是レ本書ノ生レ出デシ原因ナリ。

口演者識



- 蟻と蟬の話……………二十四丁
- 蛙と鼠の喧嘩せし話……………二十八丁
- 犬と佛狗の話……………三十丁
- 權兵衛と鳶の話……………三十三丁
- 眼と足との話……………三十五丁
- 鴉と孔雀の話……………三十九丁
- 鹿と狼の話……………四十三丁
- 狼と野牛の話……………四十五丁
- 病める狸乃話……………四十八丁
- 虎と樵夫の話……………五十丁
- 兎と百姓の話……………五十二丁

附 録 目 録

- 猿に留守を頼んだ話……………五十五丁
- 蛤と鱈の話……………五十七丁
- 獅と鼠の話……………六十一丁
- 蟹と蛙の話……………六十三丁
- 畜生も恩を知る話……………六十七丁
- 鼠の猫退治願(墓)の意見……………一丁
- 兎と猿と墓の餅搗話……………十三丁
- 鏡を知ぬ人乃話……………十七丁
- 不孝なる子息鶏よ騙された話……………二十一丁
- 孝の道しるべ……………二十五丁



- 案山子あんざんこのはなし話……………三十五丁
- 子守歌こもりうた……………三十八丁
- 殊勝しゆしょうなる小娘こむすめ……………三十九丁
- 子蟹こかに不孝ふこうなる小兒こどもを説諭せつごんせし話……………四十四丁
- 猿主人さるしゆじんを助たすけし話……………四十七丁
- 以呂波讚いりはさん……………四十九丁
- 天輪てんりん敎きやう攻撃げんげき歌……………五十一丁
- 盲めくらと聾おしと聵いせりの火事くわまに近あひし話……………五十三丁

少年佛敎 修身はなす

鎌田淵海師口演 顯道居士筆記



少年佛敎修身なま (一本)

のはなし話  
 會かいと催もよほし猫ねこの害がいを防かぎらんことを商議しょうぎせし  
 と思おもふ程ほどの妙案めうあんも出いでざりしが最さい後に至いたる  
 とき小こ鼠ねずみ進すすみ出いて咳せき一いっ咳いして最さいと誇ほこり顔かほ  
 に申まをし述のける様よう先まづ刻とき來き種たぐ々々評議ひやうぎも出いでたれども何なにれも  
 小田原おだわら評議ひやうぎに止とどまりて骨折ほねをり損そんの草臥くた儲たくわけたるに過すぎ  
 す茲こゝに聊いさか拙ちが鼠ねずみ代しろ卑見けんあれば幸さいはひに諸君しよくんの御討議ごたうぎに預まかり



少年佛敎修身はな (二本)

度一抑も我輩鼠たる者  
誰れか生命を惜まざるも  
のあらんや誰れか好んで  
危険を踏むも乃あらんや  
然一乍ら從來多く猫の害  
を受くる所以のものは一  
に彼れれ近寄り來るを知  
るに由なくして不意を襲  
える、に外ならず然れば  
則ち今日の緊急問題とも



少年佛敎修身はな (三本)

云ふべきものは彼れ猫の項領に大なる鈴をつけ其來襲  
を知るにありと陳へ了りて髻を捫り左右を見渡一泰然  
として坐につきたりければ衆鼠皆其高説に伏一異口同  
音に大賛成を唱へ忽にして決議せしに其時末席に黙然  
として扣へ居たる全毛眞白色なる老鼠低聲にて物靜か  
に申し述ける様唯今れ決議は實に古今の妙案なり然れ  
とも之を論ぜるは易くして之を行ふハ甚だ難一猫の頸  
に鈴を附するの責誰か之に當るやと衆鼠默然として又  
た語るかりいと云ふ。

古人の語に三尺の童子も尚ほ能く之を言へとも八十



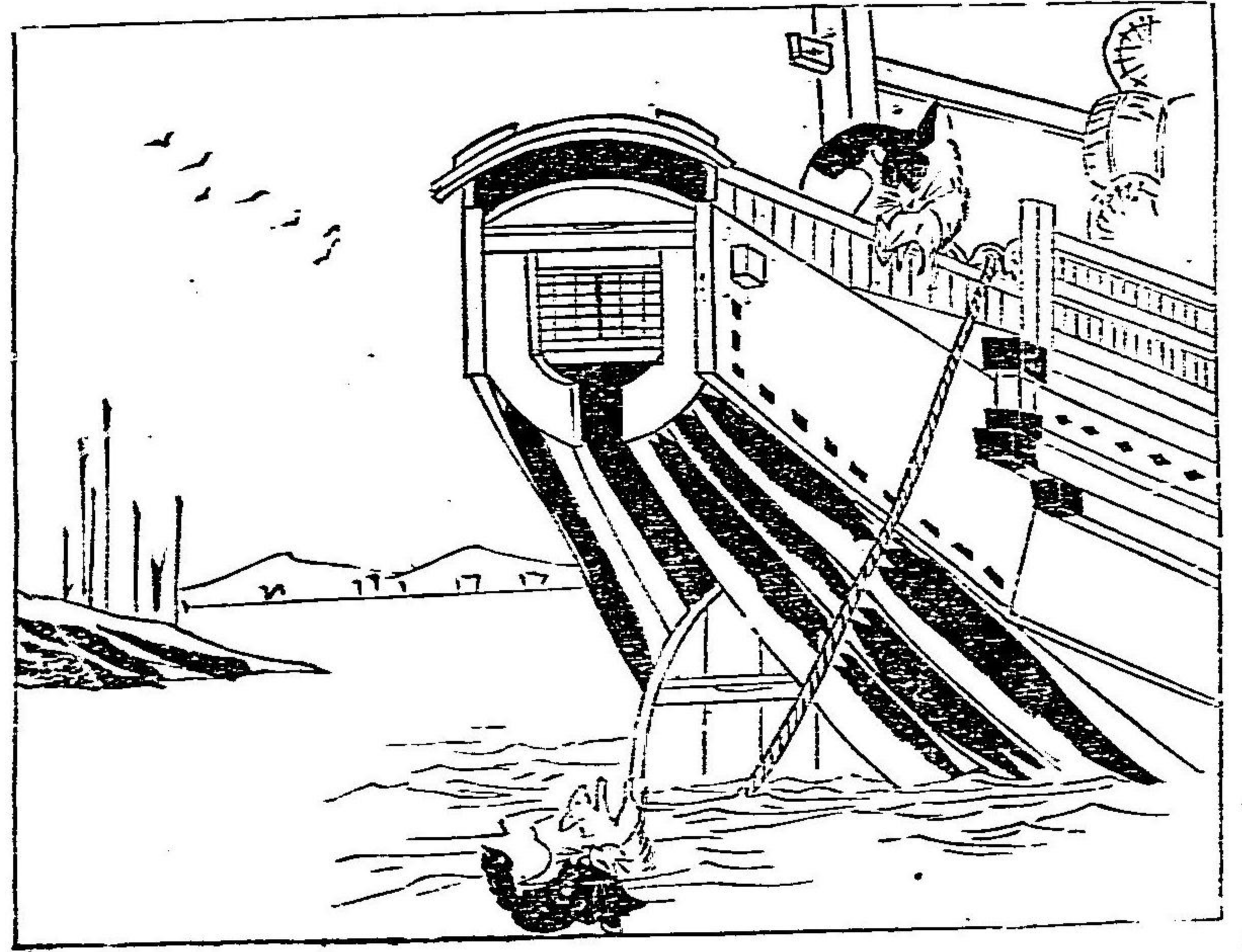
少年佛脩身なほ (四本)

老翁も之を行ふ能はざると云ふとあり凡て天下の事  
ハ議論ハ如何に甘まくとも之を行ふ事の出来ざる  
事ハ何乃役に立つものにあらず我が佛教に於て即身  
成佛とか娑婆即寂光とか云ふ説ありて一應聞た所  
でハ如何にも面白く如何にも高尚なれども之を實際  
に行ふことハ余程の大徳にあらずれば能はざるとに  
て今日乃吾人は夢にも見るとは出来るとなれば我  
が根機に相應せざる彌陀の本願を信ぜざるこそ早道なれ

猫と鼠の話し

少年佛脩身なほ (五本)

昔一大阪上りの米船が鼠  
を防ぐ爲めに猫を飼ひ居  
たるが或時猫が鼠を捕へ  
口に銜へて甲板の上を走  
せ廻り居けるに其影海水  
に寫りたるを見て他の猫  
が自分の捕へ居るより大  
がる鼠を銜へ居ると心得  
て自分の鼠を取り放し其  
影に銜へ付んとし若れば





海中の猫も亦取り放し遂に見失ふたりと云ふ

世間には一朝乃影に氣を奪はれ本來持ち來りの寶を  
投げ捨つる人が澤山あることなるが能く注意せ  
ざるべからざれば世間の人が一般に望みを掛けて居  
る所の名利と其本心とを比べ照らして見れば自分の  
心がある故に名利もほしくなるのでありて凡て心が  
一番大切なるものなり然れども其本心を大切にす  
るとを忘れて唯名利さへ得れば充分なりと心得るのは  
丁度猫が眼を影法師に附て其鼠を取り失ふたも同じ  
とかり老少不定乃世の中に住める吾人は唯今も知れ

空露の命なるに本心の往く先きとは更にかまはざ  
名利乃影斗に汲々として遂に五十年を終るのは米船  
の猫と同じことにて萬物の長とは云はれざるべし戒  
しめ謹まざるべからざ

病める小鼠の話

永く病氣づきて居る小鼠が枕邊に居る母鼠に向て阿母  
様何卒私の病氣の療る様神佛に祈禱をして下されと云  
ふ母鼠を頻りに歎息して嗚呼汝は平常神佛の御供物を  
取り喰ふて居るから祈禱をしても聞ては下さるまらと



少年佛脩身なほ (八本)

涙乍らに語りしうば。小鼠  
は復た返へず辭もなかり  
いと云ふ  
凡て手足の壯健に動く  
時は之を憑とし恩ある  
人にも仇を酬ひ平氣乃  
平左衛門て世を渡り居  
るは無教社會の常なれ  
ども不慮の災難に逅ふ  
時は叶はぬ時の神頼と



少年佛脩身なほ (九本)

やら。此處の金比羅彼處の不動と飛む廻らぬものは  
一平常の行ひ善からざして偶然のときに頼んでも誰  
れも救ふ者はあるまじ。佛敎に平常を慎しめとれ玉ふ  
ものえ。畢竟此小鼠の後悔を取る勿れと乃御戒に外な  
らま心あらん人々は深く注意せざるべからま。

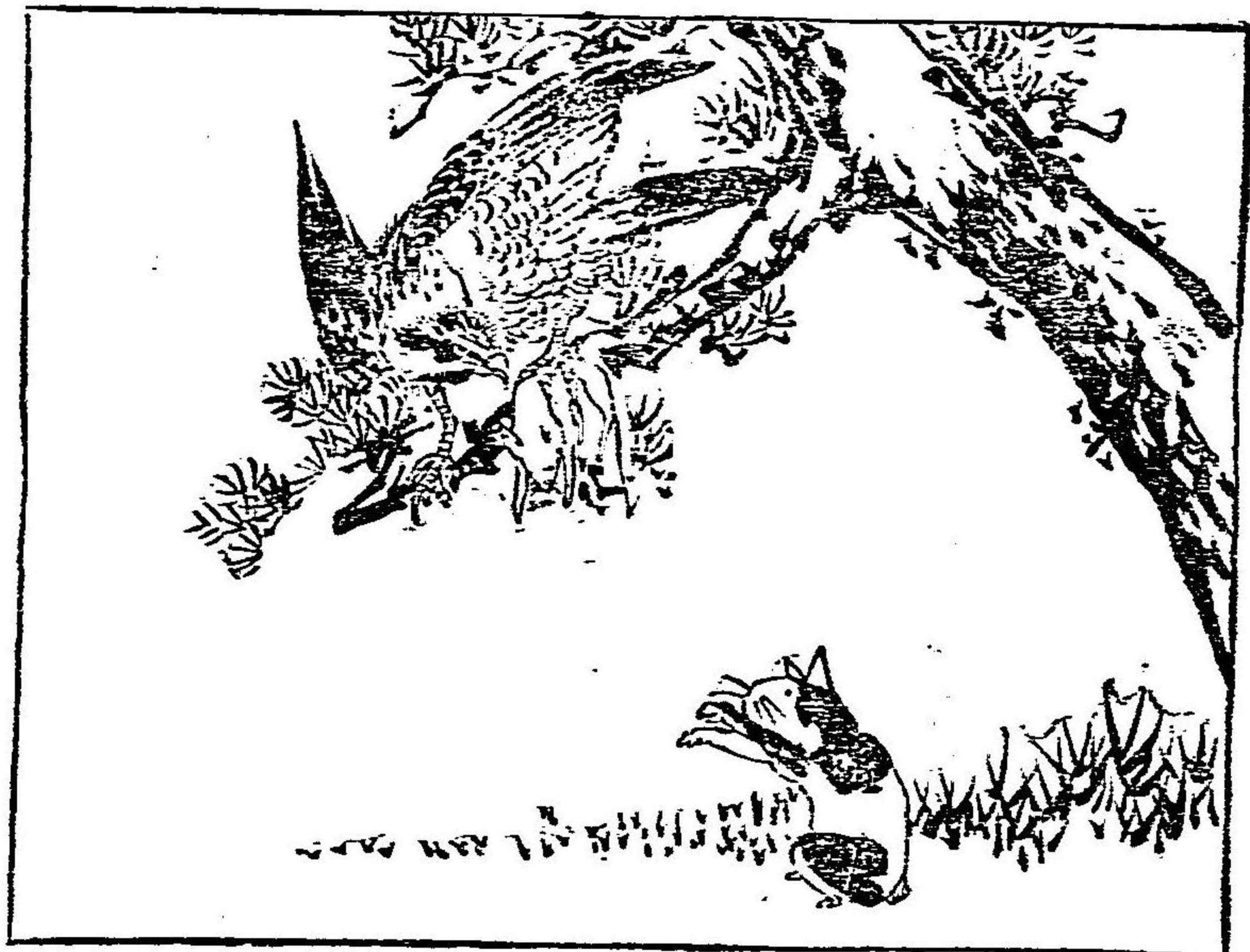
鴛が猫に欺されたる話

或鴛鴦鼠を攫み去りて喬木の上へ飛上り。ゆくり御馳  
走にならんと歡で啄へ居ると猫が之を見て如何にも羨  
ましく思ひ先づ鼠を落させる工夫を考へ「鴛公汝の羽翼



志なほ身脩教佛年少 (十本)

ハ何んと奇麗ダチー夫に  
「マ」御眼があざやかかこ  
と御爪の丈夫かこと。丁度  
鷲の様ですよ。併し汝乃様  
も美しき鳥は。凡て聲の悪  
ひも乃だと聞居ますが。汝  
の御聲は如何や」と。鳶は甘  
言に乗り。吾れ一つ妙聲に  
て歌ひ。猫を驚かすやらん  
と。大啄を開きければ。啄へ



(一十本) 志なほ身脩教佛年少

居たる鼠は。地上に落ちたり。猫は早速駆け付け。引啄へ後  
とも見ぞして逃げ去りいとぞ。  
口に蜜ある者ハ腹に劍ありとやら。内心に野心かくし  
て。無算考に他に阿ねるものはあらざるべし。頃日西洋  
の人々が。我國に入り來り。頻りよ日本の事を賞め。氣候  
の好ひ事。土地の肥へたる事。國体乃美しきこと。實に萬  
國にも類ひありませぬ。併し日本の様な新開の國の宗  
教を大概基督教では無ひと云ふことでは。如何や」と  
尋ねければ。輕薄連中は最早その甘言に乗り。中々左様  
は参りませぬ。吾人も基督教を奉ずるものですよ。自慢

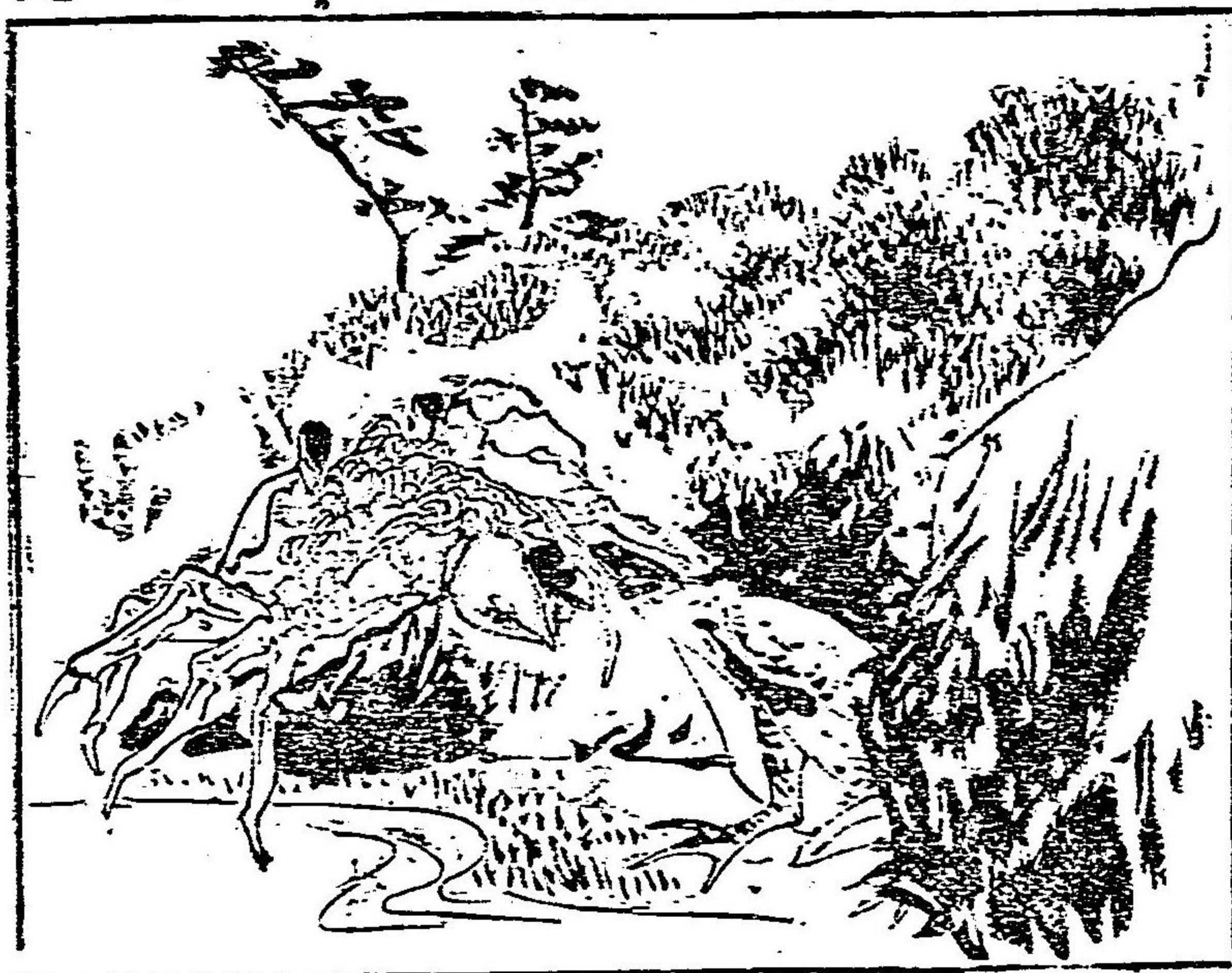


らしく大口開ひて「あーめん」を唱へんとすれば日本固有の日本魂と云ふ愛國心の鼠を大平洋に取り落し赤髯の洋猫に喰ひ取られますよ。御用心々々々。

蟹と蟻の話

或時蟹岩の間よりはひ出で泡を吐きつゝ、遊び居たり。が蟻之を見て貴公の泡を吐れるは何の爲めなるかと尋ねければ蟹泰然として「君知らざや吾は動物社會の大醫王なり我が泡を嘗める者ハ萬病立ちよ平癒すると請合あり」と蟻笑ひ乍ら「イヤア」先生は御自分の横歩だも療は

こと出来ざして他の療治をするとは以ての外のことどもなり」と云ひければ蟹は早々逃げ出せ」と云ふ。惠灯大師の御詞に自分に物を持たざして他人に與ふことは出来ざと仰せられたることある。凡て他人の惡事を諷し誡しめんとするに先





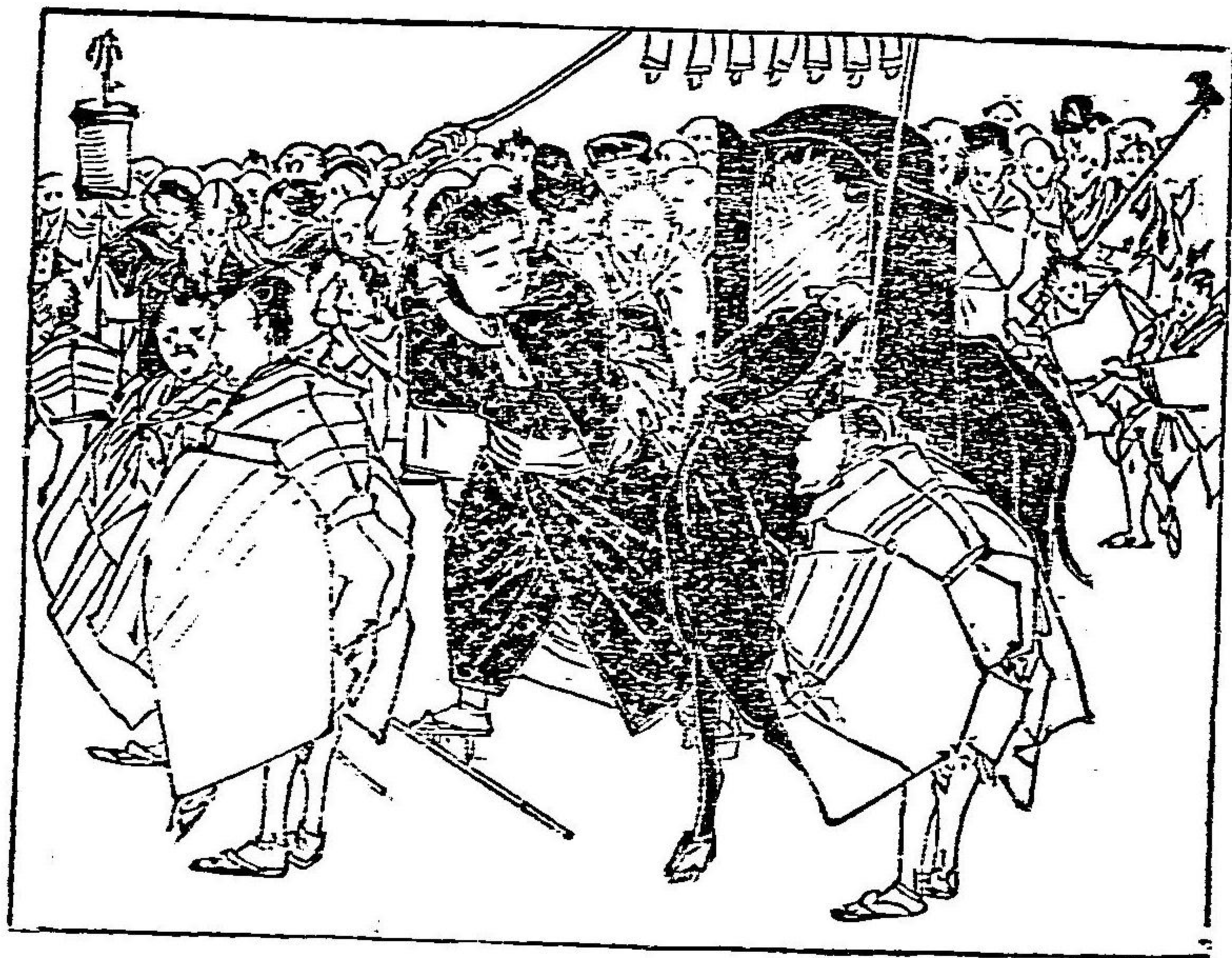
づ我身の行ひを正しくせざれば却て逆耻をかくことあり注意せざるべからず

遷佛會の牛の話

或御寺に遷佛の大法會を營み一時佛像を牛に負せて市中を行列せしに途中の人々皆合掌禮拜せしは牛之を見て最と誇顔に歩み行くと壯士体乃者進み寄り鞭をあげて此畜生め己が威張譯ハるい佛像が尊のじやと打なぐりたりと云ふ。

世の中にハ随分此牛連中が澤山ありて學問も無く見

識も無く筆で書くことも出来ざ口で説くことも叶はざ唯古からの仕來りて何の役とか何の職とかに就き居り役目の御蔭で敬れるのを知らざして己が貴きゆゑと思ふ者あり此等の族は其役目を取りあげらるゝか又は壯士にても





出逢たならば一なぐりにせられねばならぬ。天保時代の老人方は仕方なけれども明治の少年輩は斯る馬鹿威張をいかに様注意せざるべからず殊に佛教を信する者は觸光柔軟として一度佛光に照されぬれば心も語も柔かにして家内の和睦は勿論世間の人に交るのにも慈悲を以て本とせねばならぬことなり。

鳥と獸と戦の話

昔或る處に於て鳥と獸との間に大軍が起りて未だ何れが勝とも何れが負とも定まらざるに當り蝙蝠は我身

の勝手を考へ其姿の鳥とも云へど獸とも見へざるを幸として何れへも付かざる得知らぬ顔して居たりけるに稍暫くして鳥勢の旗色強きを見て早速鳥軍に加はりたり如何なる掛引にや獸勢の方俄かに強くなり鳥軍頻りに危く見へれば蝙蝠は亦早





速獸軍そくじゆくぐんにくわ加くわえり、力ちからをま戮まて鳥軍とりぐんを攻居せうきたり。適々たたく局外きよくがい者しやの伸裁しんさいにより、双方さうほうの和睦わくどく調てうひたり。扱さくて其時そのときに當り、鳥とりも獸けだものも蝙蝠かろうの節操せうさうをにく惡にくみ、其同盟そのどうめいにくわ加くわへざして、白晝ひくわ出でることと禁きんざとの嚴罰げんばつを言渡いかわたしたれば、夫れそより后のちは、黄昏くわんにのみ飛とび廻まはり居おると云ふ。

吾人われ々間じんも丁度ちやうど其その如ごとく、信しんもなく義ぎもかくして、我身わがみの勝手かつて斗はかりを謀はかる者ものハ、遂つひに世間よじんに容いられざ、廣ひろひ世界せかいに生なれ乍あはら出で度たい處ところへも出でられざ、肩身かたみを狭せまめて世よを渡わたらねば、からぬ有様ありさまとなる者ものなり。又また彼かの見眞けんしん大師だいしが彌陀やだの大願だいがんを信しんざる者ものは、諸神しよじん諸佛しよぶつに祈念きねんすること勿なれ

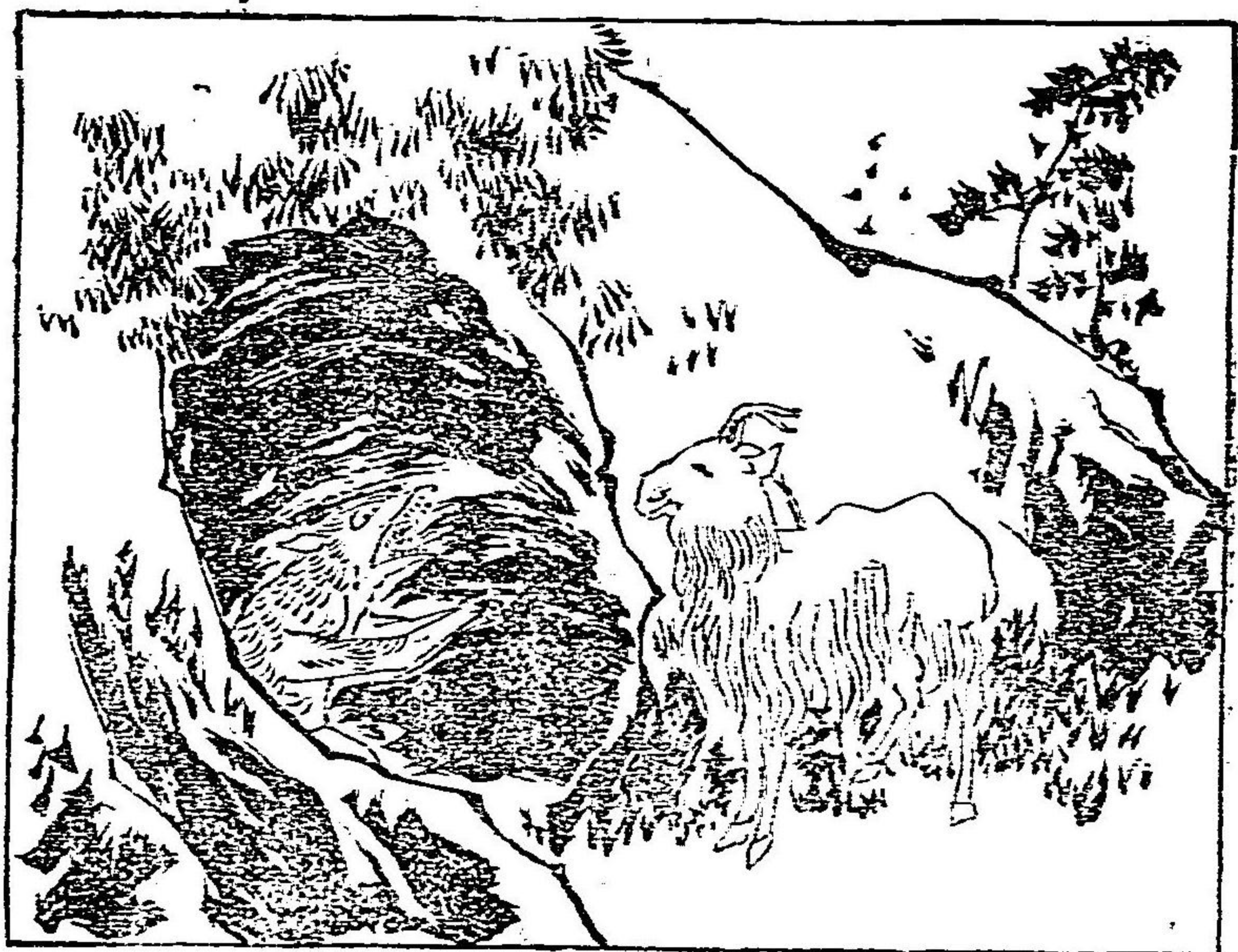
と教しよへ玉たまふものは、實まことに此蝙蝠このかろう主義しゆぎ乃すなはち信心しんじんを御誠おんまことめかされたるに外ほかならざれば、彌陀やだ一佛いつぶつの悲願ひがんによりて、安心あんしん立命りつめい、未來みらい地獄ぢごくの苦患くるわんを免まぬかる、者ものこそ眞實まこと乃すなはち信しん者ものとは申まうすかり。

狼おおかみと羊ひつめの話はなし

或山あるやまに住すまける狼おおかみ大怪我おほいけがをおし、身体からだ自由じゆうからざして、洞窟どうくつの中なかに臥ふし居おたり。偶羊あま通とほり掛かるを見みて、最いと憐あはれならる聲こゑを出だし、若もし羊公ひつめこう御覽おんらんの如ごとく大怪我おほいけがをおして、誠まことに困こまり居おることなるが、何卒なにとぞ格別かくべつの御慈悲おんみじひを以もつて、水みづを一いっ杯ぱい持もつ



で来て呉れ玉へ。左れば  
食物は私が尋ね来るから  
と頼みすれば羊は早くも  
其意を悟り如何にも御最  
の仰せなれども僕が水を  
持ち来れば僕は其儘貴公  
れ喰物となるのだから眞  
平御免を蒙るとして一生懸  
命に逃げ出したりと云ふ。  
凡て言語ハ如何に柔和

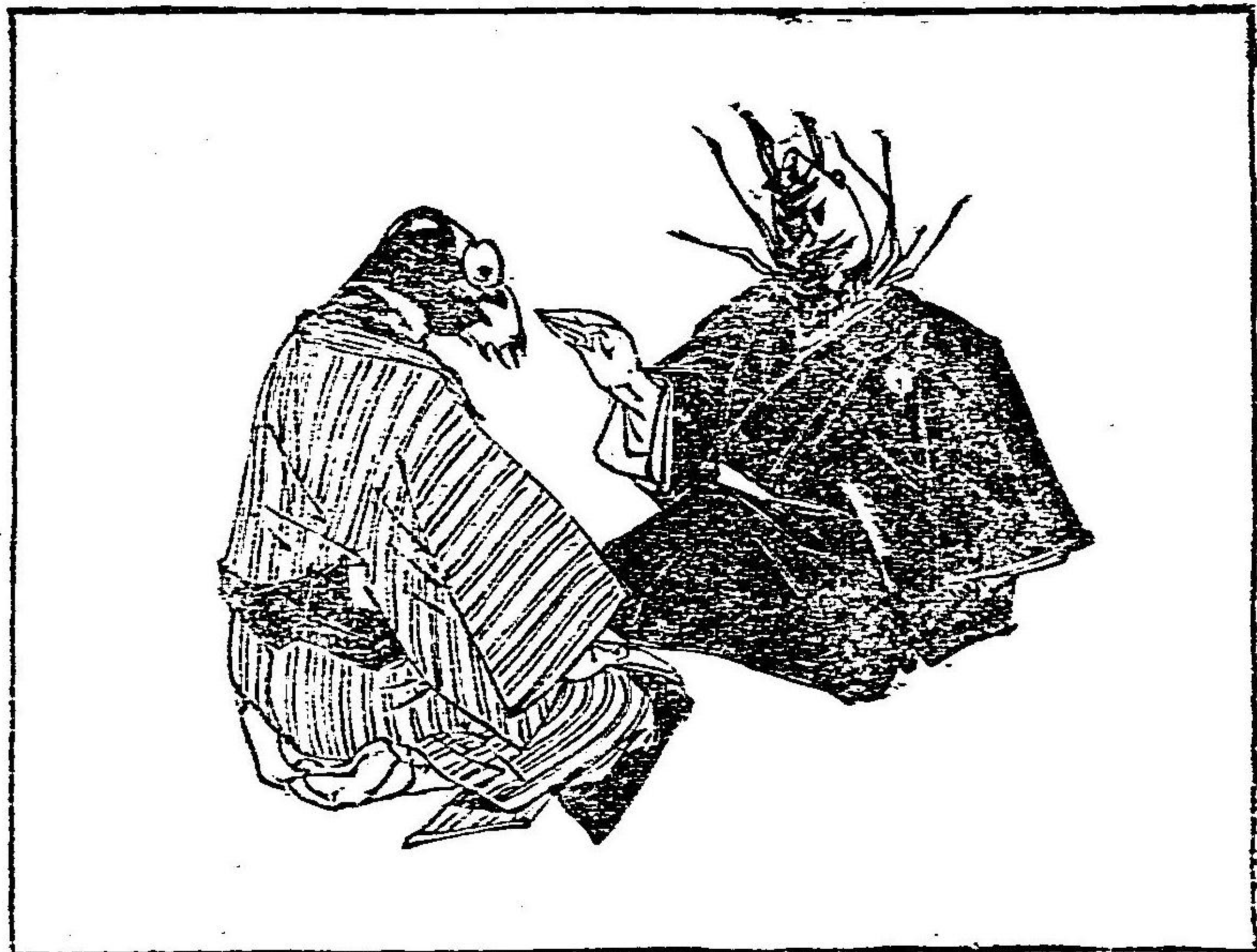


なるも平生心れ悪しきものえ偶然の時には迷惑せぬ  
ばならぬ。左すれば吾人々間に於ても平常の心得が大  
事であるから謹まねばならぬことなり。佛教に外面善  
薩に似て内心夜又の如志と仰せられたのは畢竟此の  
狼心を御叱りかされたものなり。又或る御教化に心口  
相異なりて悪事を働くものは其人必は悪果を招くと  
仰せられたるも矢張此悪心を御戒めあらせられた  
るものなれば諸子は此佛教によりて正直を本とし心  
口一致乃行を爲さざるべからむ。



蚤と虱の話

蚤虱乃歩行の緩きを侮り  
嘲弄して若し虱公競走を  
して見様ではないか失敬  
ながら乃公等の足も一日  
千里れ神通ありと威張け  
れば虱は迷惑ながら承知  
して左らば遣せて見様と  
一處に飛び出さんとせし  
に蚤を冷笑して虱公君は



如何にも大胆者だ「マ」御先に遣り玉へ僕は一睡して后  
から直に追ひ越すよと云ひければ虱はぼつゝ競出せ  
しが蚤は蒲團の縫目に頭を入れ一睡一暫くありて眼を  
覺まし最好らぬと飛び出し約束乃場所に着て見れば虱  
は既に到着して欠伸をして居たりしかば蚤は面目をさ  
そうに顔を赤らめ御断を申すのべたりと云ふ。  
凡て自分の腕前を誇り他を侮る時は意外の恥を招く  
ものなり假令痴鈍なりとも日々の課業を怠らざれば  
汲々して勉むる時は如何なる才子にても左程負ける  
ものにあらず世の才子たるもの鑒みざるべからざり又



世の鈍才家は勉めざるべからず。若し此話を以て人事  
乃一大事に取て云て見れば後生の往く先きを聞くこ  
とや研ることは吾人少年の時にしなくも老年にかり  
てするも晩らす杯と投げ捨て置くのハ丁度蚤が自  
分の壯健を頼みて虱に負けたも全じとにて無常轉變  
のと云ふ虱ハ一時も片時も休むことなく。昨日より今  
日となり。去年より今年となり。ぼつゝ歩みづめで居  
るのだから。何時負けるかも知れざるゆへ後生の大事  
は一日も忘れてはならぬことなり。

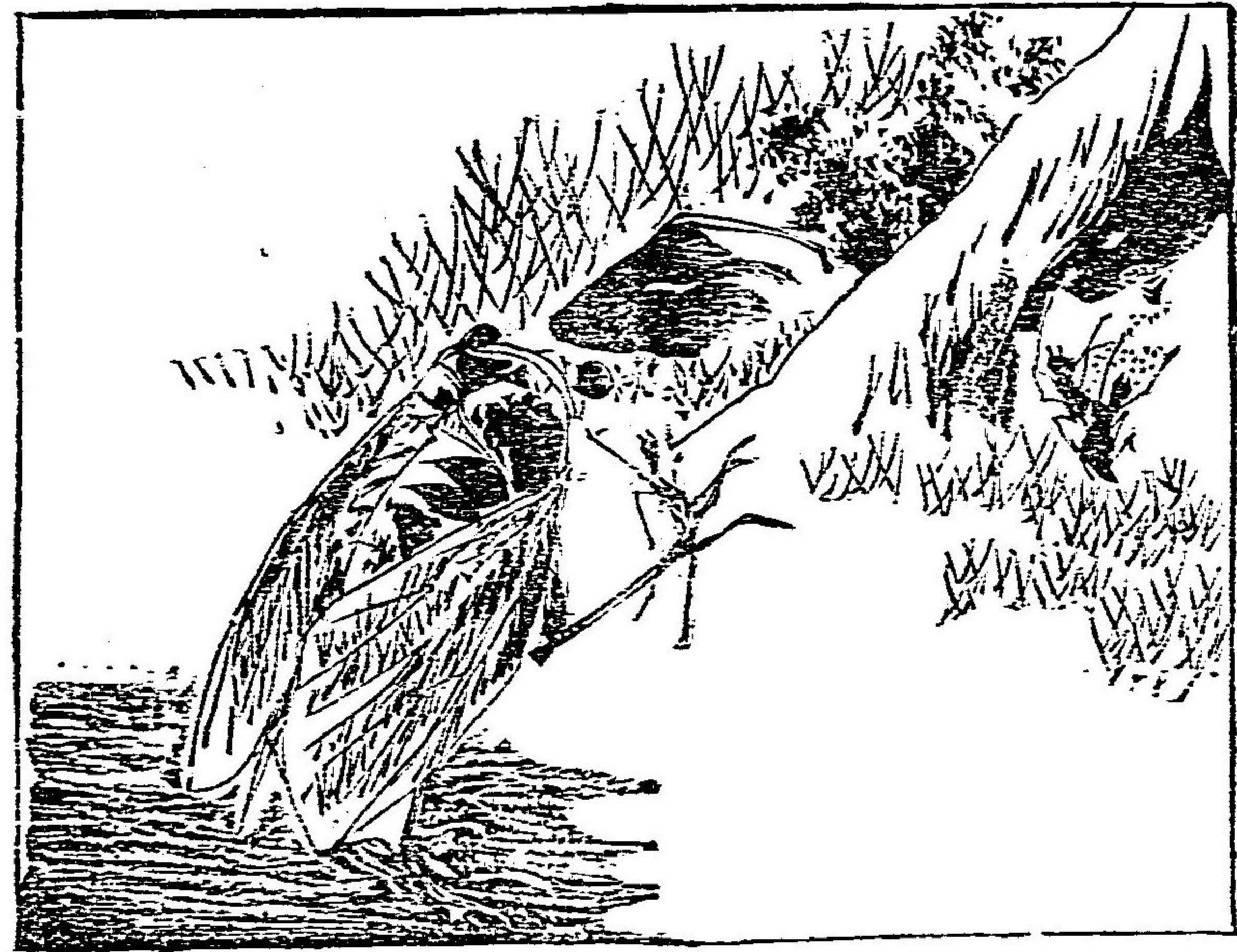
蟻と蟬の話し

秋風颯然として吹き來る頃。蟻ども多く一つの穴  
へ寄り集ひ夏の日に取り寄せ置きたる餌を詠めつ、最  
と面白ふに遊びけるに偶一疋の蟬來り。顔色青さめ生氣  
絶へなんとして。最と憐なる姿を以て泣き々々云ひける  
様。若し蟻殿。近來食物に困り。御覽の如く飢へに堪へ兼ね  
る次第なるが。何卒格別の御仁惠を以て。貴殿方の御食物  
を御分る被下ことは。計ひ間敷やと申しければ。頭領ら  
き蟻之に答て。成程仰せ乃如く。御飢餓の体千萬氣之毒に  
思へども。茲に貯へ居る餌は。天から降たてもなく。又た地



罹りたでもおかけれども斯る寒さのあらふとは露知らざ  
 夏乃日に於て草葉よ戯むれ青木に遊び飛んだり翻ねた  
 り謠ふたりして食物の用意としてハ更よ致さしりーと云  
 ひければ蟻は大よ打笑い自業自得を因果の道理働くべ  
 き時に働かず難儀になりて後悔は吾輩に知る處にあ  
 らずとして返付けたりとや。  
 諸子よ此話は啻に蟬の事斗ではない萬物の長とも云  
 はる、人間の中にも往々此蟬に類するものあり彼の  
 元氣壯健の時に於ては地獄は無ひとか未來ハ無ひと  
 か出放題出鱈目の大口切りて居れども血氣次第に衰

から湧き出たでもなく吾  
 輩多勢の者が夏の炎天を  
 も厭はず汗と脂を以て四  
 方八方より拾ひ集めたる  
 者おれば無算考に御分け  
 申す譯には参らず全体汝  
 等は何故に飢へる乃か尾  
 濃兩國の如き大震災にて  
 も罹りたのかと尋ねけれ  
 ば蟬は顔を赤らめ震災よ



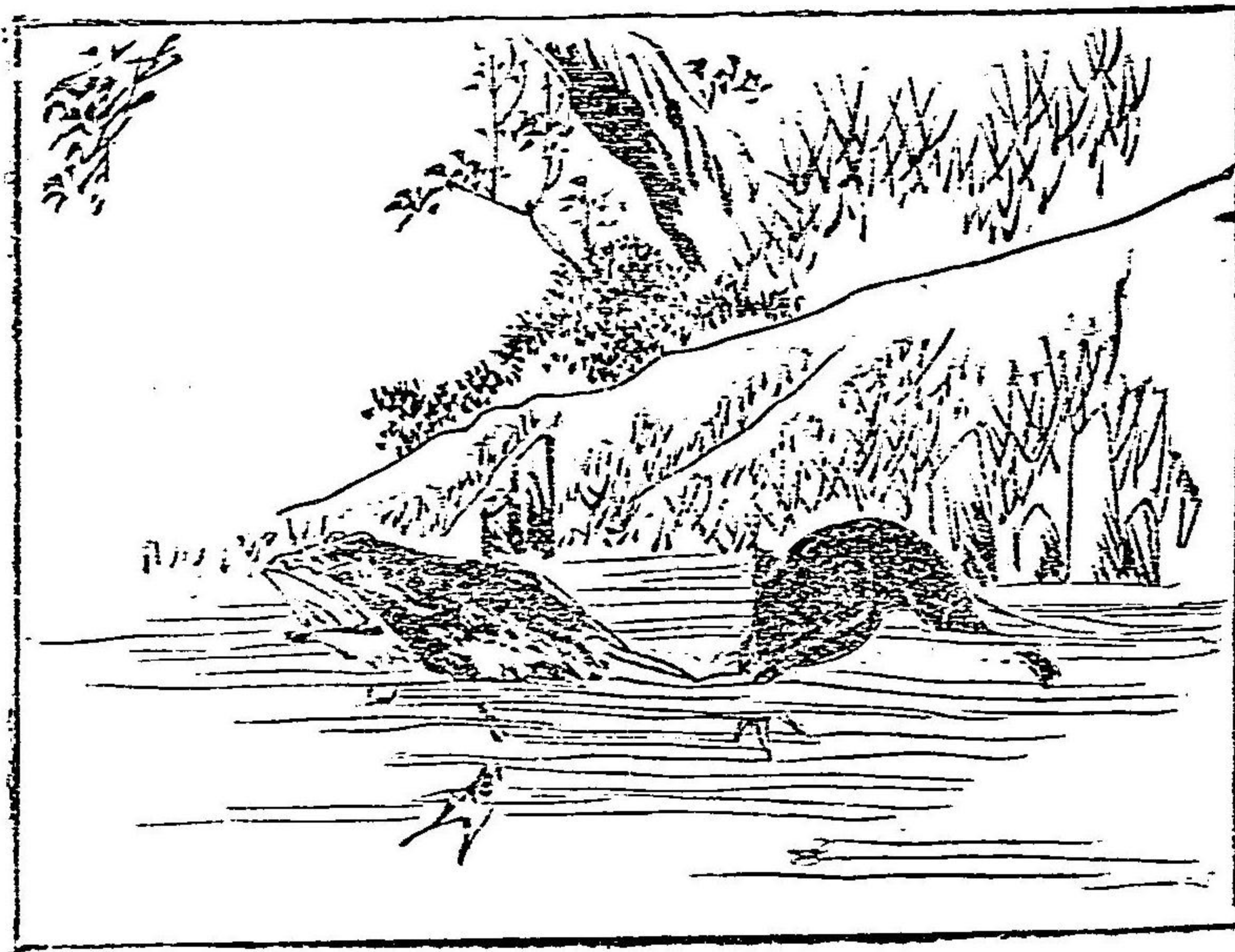


へ。棺桶に足を入れらるける様よかると。何となく心寥し  
くかりて。俄に狼狽へ廻はり。説教を聴ふと思へども耳  
は聞へど。佛書を読まふとすれども眼は見へど。只管后  
悔の涙にむせぶ斗なり。諸子よ。血氣盛んなる今日よ於  
て。充分に安心立命して。蟻の嘲を取ること勿れ。

蛙と鼠の喧嘩せし話

夏の頃一疋の蛙ありて。芋畑の岸に遊ひ居けるに。折悪し  
く蛇に睨み付けられ。如何にもして逃げ出さんと種々工  
夫すれども。別段妙案も考へ出さざりし。偶傍に小鼠

が居合せたるを幸に。雙方  
相談して。蛙ハ鼠の尾に取  
り付き。此處を最後と馳せ  
出。凡そ十間斗も逃げた  
りしに。生憎小河に出合は  
せければ。蛙は頓智を出し  
て。鼠公汝は水にハ不熟ぞ  
あらふから水上丈けは已  
が先きに渡るをへ。汝は己  
れの後足に取り付た玉へ





と云ひければ鼠は蛙の言を信じ渡りかけたるに中流に  
及び蛙以爲らく嗚呼喜しや蛇口を免れた鼠に對しては  
氣之毒なれども此儘水底に隠れなは大丈夫なりと鼠に相  
談をもせずして水底に沈まんとしたれば鼠は大に腹を  
立て汝を己れを水攻にする積りか其手は喰はぬと河中  
に於て大喧嘩を初免居たりしや蛇は其間追ひ付き蛙  
と鼠を併せ呑みたりと云ふ。  
諸子よ自分の身勝手斗を計ときは凡そ斯の如きもの  
かり爰を以て佛教にては利己と云ふことを厭ひ自利  
と利他と并む行ふことを勧むるなり若し諸子にして

他人の不幸を悲しむことは我身の不幸をくやむが如  
く他人の幸福を祝することは我身の幸福を喜ぶが如  
く他人と我身と隔を忘るゝからは諸子が幸福と名譽  
は坐して待たること疑ふべからざるなり諸子夫れ旃  
を勉めよや。

犬と佛狗の話

或る田舎に犬と佛狗とを畜ひ居たる人ありしや佛狗は  
常に主人乃膝の上より取り擧りて遊び戯むれ食時には菓  
子とり饅頭とか種々の御馳走に喰ひ飽きをして居けれ



は。犬は之を羨み。不圖嫉妬  
心を起こし。吾れも佛狗と同  
じく主人と洒落れ御馳走  
を食べんも乃と決心し。  
或る日の事とか主人の居  
間に取り上り跳だり躍た  
りしければ主人は大聲あ  
げて叱り付け棍棒を以て  
なぐりたれば犬は大怪我  
をして吼きく庭に逃げ



たりしとかや。

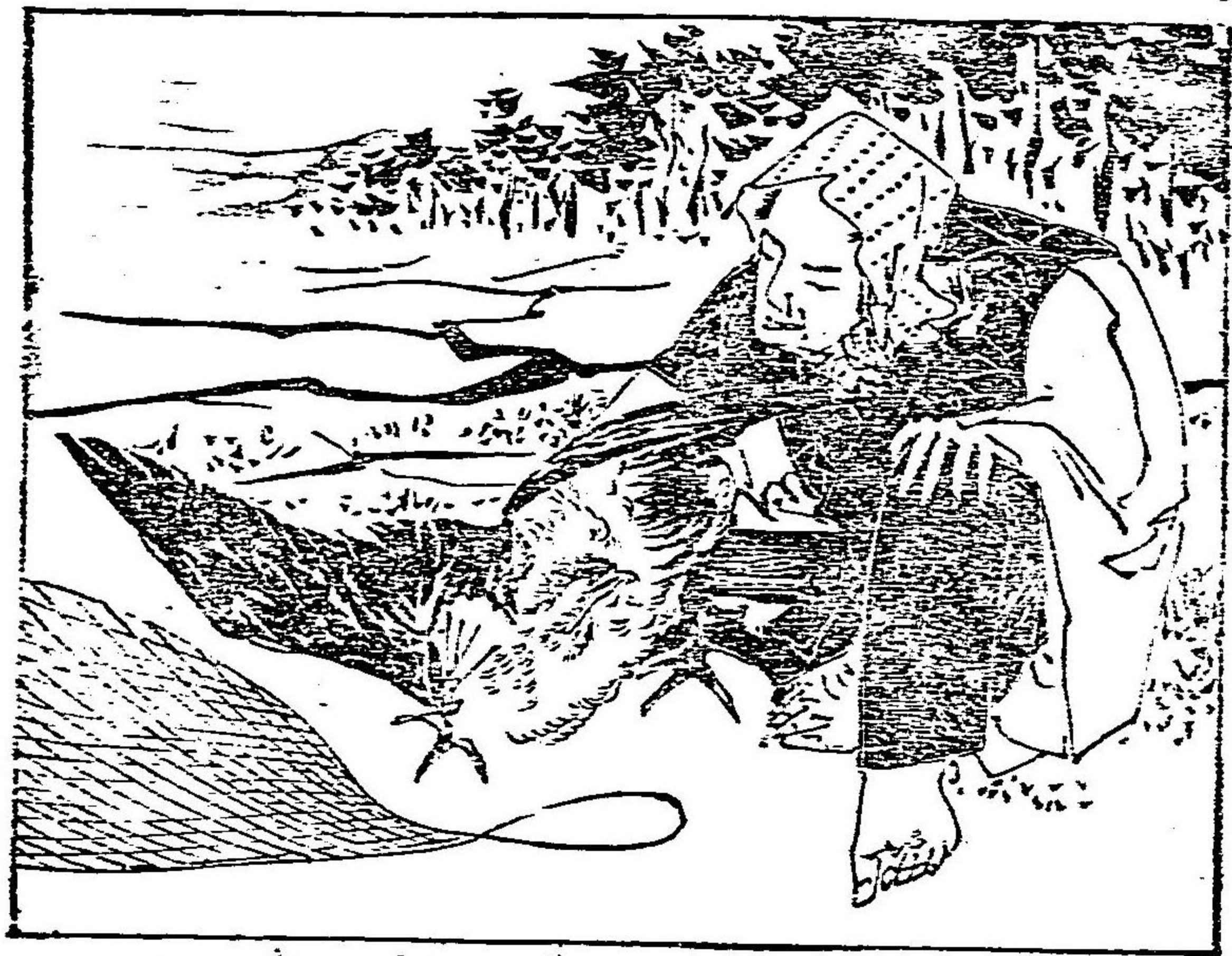
都て自身の本分を忘れて他を羨む時は意外の怪我を  
招くもれなれば万事に付けて各自の本分を守らざる  
べからば彼の佛教に於て我慢勝他の心を戒め給ふ  
のも畢竟斯様の怪我をなす勿れとの意に外ならざと  
知るべし。

權兵衛と鳶の話

昔一權兵衛と云へる農夫ありけるが其時きつけたる畑  
を荒す所の鳥を捕へんとて網を仕掛け置きたるに夥多



の鳥か、り居て、内に鳶一  
羽交り居たりしが、鳶は最  
と憐れかる聲を出して、私  
は鳥ではありませぬ。私は  
決して畑を荒したことは  
御座りませぬ。何卒御許し  
下され」と頼みたれども、農  
夫は中々承知せざ。成程汝  
は荒らしは仕ないかなれ  
ども、併し鳥と一處に此畑



に遊び居る己上は、共々相談したものと見ればならぬと  
て、遂に縊め殺したりと云ふことあり。  
諸子よ、若し此鳶が鳥と一處に居なかつたならば、決して  
此禍ひに罹るも乃てはある間敷に、唯友達が惡るか  
つた斗りて、縊め殺されたるにあらずや。古人の語に、其  
人を知らんと欲せば、先づ其友を見よと云ふことあれば、  
成る丈け良友を撰んで、交際せざるべからず。御釋迦様  
は、佛敎の信者を指して、我が親友なりと仰せられたれ  
ば、諸子に志して、佛敎を信する時は、諸子を天上天下唯我  
獨尊する、御釋迦様は親友なるが故に、諸子が地位は實



に高尚なるものと言はねばならぬ。豈に信ぜざるべけんや

眼と足との話

或時兩足相談して一揆を起し互に申合せけるハ全体吾々の働きと云ふものは實に難儀なること斗にて起きたときは歩まねばならざ坐した時には下に敷かれ朝から晩まで休息するとは更になし。若し働きの方から考へて見れば吾々は最上部に居ねばならぬ筈なるも却て彼の仕事を仕ない眼の様を物が最上部に居て吾々が最下

部に居るとは何事ぞや。今後は決して働くまひと覺悟せしめば眼は密かき其相談を聞き大に腹を立て彼等が歩む時には吾々が注意してやればこそ危険な處へも陥らず溜水の中へも踏み込ばざるに斯る御恩を忘れて仕舞ひ勝手我儘をぬかず奴である最





今后を更さらに構かまはぬと決心けっしんし、偶足あふが歩あむに當あたり、眼めを寝ねり  
志こころて居ゐたりしハ、忽たちまち溜水たづみの中なかへ落おち込こみ、頭あたまも足あしも物もの  
身み水みづに溺おぼれたりと云いふ話はなしあり。

凡まそ事ことの敗やぶれる乃すなはち皆みな此このこそと云いふ事ことを、我われ方はうに付つけ  
て乃すなはち公こうおればこそと、已う惚ぼ心こころを起おこすからである若もし  
こそと他人たにんの方はうに付つけるなら、彼かの人ひとなればこそと云い  
ふことにならるから善よく治おさまるに相あ違ちがひなかるべし。佛ぶつ教けう  
にありては、堅かたく此この儀ぎを戒いめ玉たまふて、彼かの我われ身みは惡わるき徒たつら  
ものと思おもひつめよとあるのは、こそと我われ方はうに付つけると  
を御ご戒いめなされた語ことばにて、又また彼かれ和わ合ごうを以もつて、世よを送おく

れとあるのは、こそと他人たにんに付つけて喧嘩けんか口論こうろんのない様よう  
よせよとの御ご教けうかり、希ねがはくば諸あまた子こよ。上あまた下あまた相あひ助たすけ、有あ無む相あひ  
通つうぜざるべからざる此この人ひと間けん世せ界かいに生うまれ乍あはら乃お公こうおれ  
はこそその我われ慢まんをつのり、之これを小せうにしては一家いっかの和わ合ごうを  
敗やぶり、之これを大だいよしては國家こくがの衰すい頹たいを招まねく様ようかことをし  
し、眼め足あし喧嘩けんか乃すなはち嘲あざわらいを受けざる様よう注ちゆ意いせられよ

鴉からすと孔雀くわんこくの話はなし

或ある時とき鴉からす孔雀くわんこくの翼はねの美うつくしきを見て、連つらぎ美うつくしかり、自みづから思おも  
ふ様よう、彼かれも鳥とりなり、我われれも鳥とりなり、我われとて、彼かれも及およばぬ



道理あり早速真似して見  
んとて其處彼處より孔雀  
の翼を拾ひ集めて自分の  
翼の間に挿し込み孔雀等  
の遊び場に行き誇り顔よ  
て言ふ様我も今日より鴉  
の組合を脱して君等の社  
會に入りまゝたから以後  
不惡御交際被下度と頼み  
ぬれば孔雀社會は大聲に



て打笑ひ且つ鴉を諭して言く我等の翼の美まゝいのは天  
然性質でありて特更な飾り付けたもれにあらざるゆへ  
誰が見ても美しいとなれとも汝の性質は眞黒きがゆへ  
に如何に眞似せんと勵んで見ても所詮其乃効なく其の  
上に一層見醜くなるら及ハぬことは眞似とせぬが善  
いと最と懇に告げたり一かば鴉は大に恥ぢ顔を眞黒く  
して其の場を立ち去りたりと云ふ。

我々人間に於ても身分不相應の考を起し木綿や着物  
で辛抱せぬばならぬ者が絹布を着たり麥飯喰ふて堪  
忍せぬばならぬ者が西洋料理で奢る時は丁度鴉が孔



雀を眞似したと同じ事よて世間の人から笑ひ嘲けられ赤面して逃げぬばならぬ様を事にさるものなり之を曰惚根情とも我慢邪見の人とも云ふなり。大慈大悲の御佛は此の事を吾人に諭して給はく汝等衆生は六道の迷界を出るとの出来かい徒流ら者であるから。一切智見の聖者方の眞似をしてはだめだから。一層鴉を鴉のなまで其の分を守れよ。迷者は迷者のかりて呆めよ。而して此の迷者を助ける佛があるから疑を離れて打ちもたれるのが。一番早道かりと仰せられたり。如此其れ身分の程を辨まへて身分相應の行をひを勉め

る時は人には譽められ愛せられ我身も得かり世間も立派なり。至極結構あるとにあれば誰人も早く佛教を聞いて自他の幸ひを祈られよ

鹿と狼の話

或時獸類會議に於て鹿が大議論を發して何んでも世の中は大小となく悉く其權利を一一平等主義でなければならぬと云ふと狼は大音をあげて鹿殿の御説は一應御尤の様なれども獸類によつては各々其伎倆あるから平等にする譯よは参るまいと答へれば鹿は何とも云



は其儘議場を引き取りたりとぞ。

形を以てすれば如何にも平等らしくありても其力量  
から考へる時は自ら上下尊卑の分る、もれかり吾人  
人間界にても其通りでありて、目あり鼻あり口あり又  
手もあり足もあるから其権利も平等でなければなら  
ぬと云ふても一應は尤もの様なれども智識學問のた  
つぷりある者は自ら上位に立つものなれば幼年の時  
から學事勉強せねばならぬことなり又更に未來の  
ことより付て考へて見ても幼年の時から佛法を信じ惡  
事を謹みて善事に勵んだ人は黄金花降淨土に生れ

て至極上等の地位に立てども之より反して惡事を働ら  
ぎ佛法を信ぜざるものは地獄に苦患を受けねばなら  
ぬこと、なり昇沈上下の區別を天地の異ひあること  
よかるものなり謹まざるべからむ

狼と野牛の話

或野原に數疋の野牛ありて互ひに睦じく遊び居たり  
が其近邊の深山に住せる狼是を取り喰はんと思ひしも  
斯く睦じく遊び居ては何分手に合ひ難しとして先づ牛の  
方へ種々流言を放ちたれば牛連中互に喧嘩を初る一つ



々々離れ々々とありたり。  
狼はこゝぞと覺悟を定め。  
片方から一疋つゞ取り喰  
ひ遂に殘らば餌食にさせ  
いと云ふ

古へよりの傳言へに笑  
ふ家には福來り怒る門  
には鬼が立つとやら此  
の鬼と云ふのは取りも  
直さば我身の災難のこ



とよて一軒の家に住み乍ら血肉を分けた親子兄弟で  
あり乍ら互に惡口罵詈訶修羅の喧嘩を初める時は仕  
事をしても手に着かば此處乃端でも損が行き彼處の  
邊ても勤がたち何一つとして得よかること、ては更  
にかゝ遂には家宅を賣り拂ひ身代限りの不仕合せと  
なるものなり世に鬼が立つとは全く此事を云ふなり。  
彼牛連中が互に睦じく遊び居たる時は狼の鬼ハ取る  
こと叶ざりしかども其喧嘩をする時に當ては易く餌  
食となりしを見て知るべきなり佛敎に天下和合す  
れば百事の災難を遁れ兵器も無用になり自他の幸福



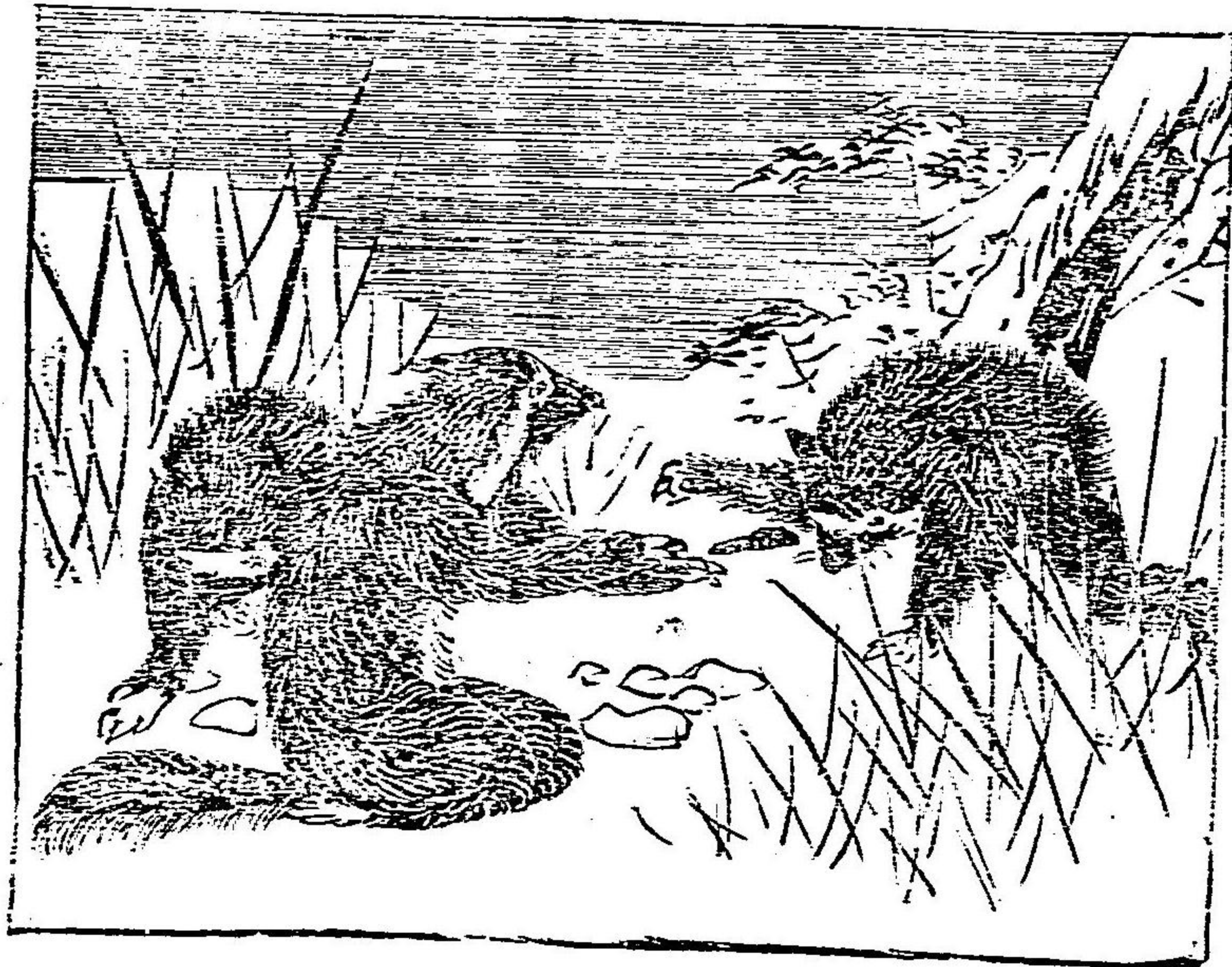
需めどして得らるゝとあるのは此鬼を逐ひ出し福の  
神を迎取の仕方を教へ玉ふなるに外ならず世の仕合  
を希ものは一日も早く佛教を信じて此惡べき鬼を逐  
ひ拂ひ喜ぶべき彼の福神を迎へ玉ふべし

病める狸の話

或山の老たる狸大病にて臥み居たりしかば日頃懇まる  
友達共交番見舞に來て其傍に積んである食物を少一つ  
、尽したるやがて狸は病氣は快愈たれども貯への食物  
をば皆喰はれて仕舞ふたるゆへ遂は餓へ死にしたりと

云ふ

友達の病氣を見舞ふと  
きは其病人が他より貰  
ひ受けたる珍味を喰ふ  
ては病人に取てハ劫て  
迷惑なれハ堅く氣を付  
ければならぬことなり。  
佛教の上から云ふて見  
れば見舞に行者珍味あ  
れば自分ハ喰はざとも。





病人の所に持参して喰はさねばならぬ。斯くありてこそ佛智を信じる朋友と云ふべきなり。

虎と樵夫の話し

或る竹藪に住みける虎。樵夫の娘と戀れ。樵夫に乞ふて妻に娶らんとせしに。樵夫の云ける様「娘は至て小胆者にて貴公の様な長き爪や恐しき牙を持て居ては。所詮承知せないでせうから。何卒爪を抜き牙を落して遊びに来玉へ」と。虎は大に喜び。早速爪を抜き牙を落して。樵夫の宅へ往き。かば樵夫は最早や。虎の恐ろしき護身かきを幸ひ

として。一打ちも殺せしと云ふ

諸子よ。虎の如き威勢の猛獸でさへ。色に溺れて打ち殺されたり。左すれば吾々少年輩も。色は立身出世の仇と心得ねばならぬ。ことなり。佛敎よ。於て色欲を戒しむるのは。全く此禍難を防ぐが



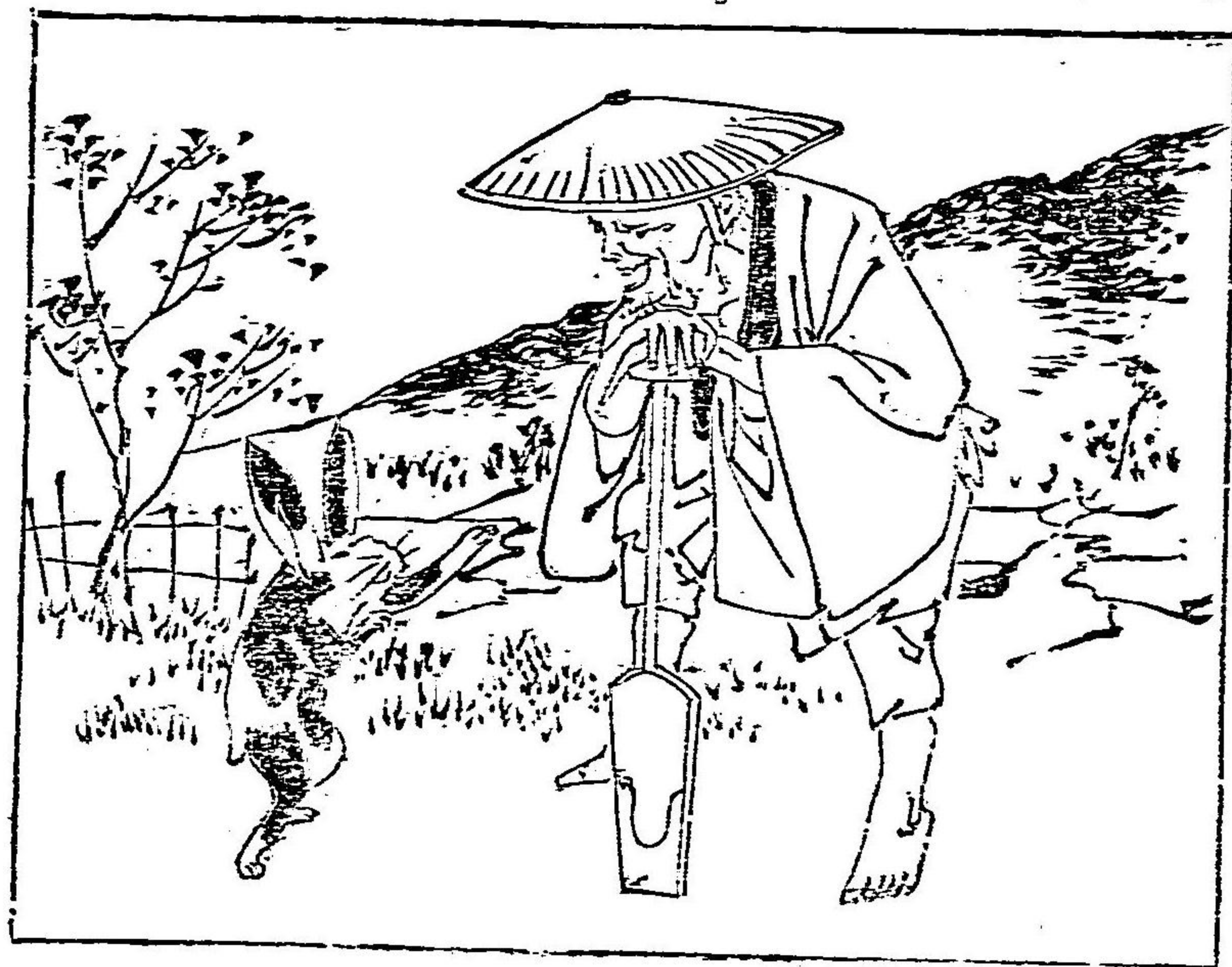


爲めよ外ならま

鬼と百姓の話

或時鬼が狩人に追ひ廻され百姓ヶ原に逃げ來り農翁に  
向ひ。今ま后とから追人が参ります。何卒隠れさせて  
被下よと乞ふたれば。農翁は合点して積藁乃間に潜ま  
めたり。暫時にして狩人走せ來り。若し農翁殿鬼が來いな  
いかと云へば。農翁は何物も参りませぬと云ひ乍ら右の  
積藁へ指さしたれども。狩人は其意を悟らざ。其儘行き過  
ぎたり。稍暫らくして鬼ハ眼をばちくさせ先ぞ々々之

れで安心。最少一乃達ひて  
命を取もれに。跳出  
て行かん。とせ一を。農翁は  
之を見付る。是れ鬼待て。助  
けて貰ふた御禮を云え。ぞ。  
無沙汰で跳び出すとは不  
届千万の奴である。と咎け  
れば。鬼え鼻を動かいつ、  
笑ひ乍らに。農翁様。汝の口  
は調法者だよ。心は丸で鬼

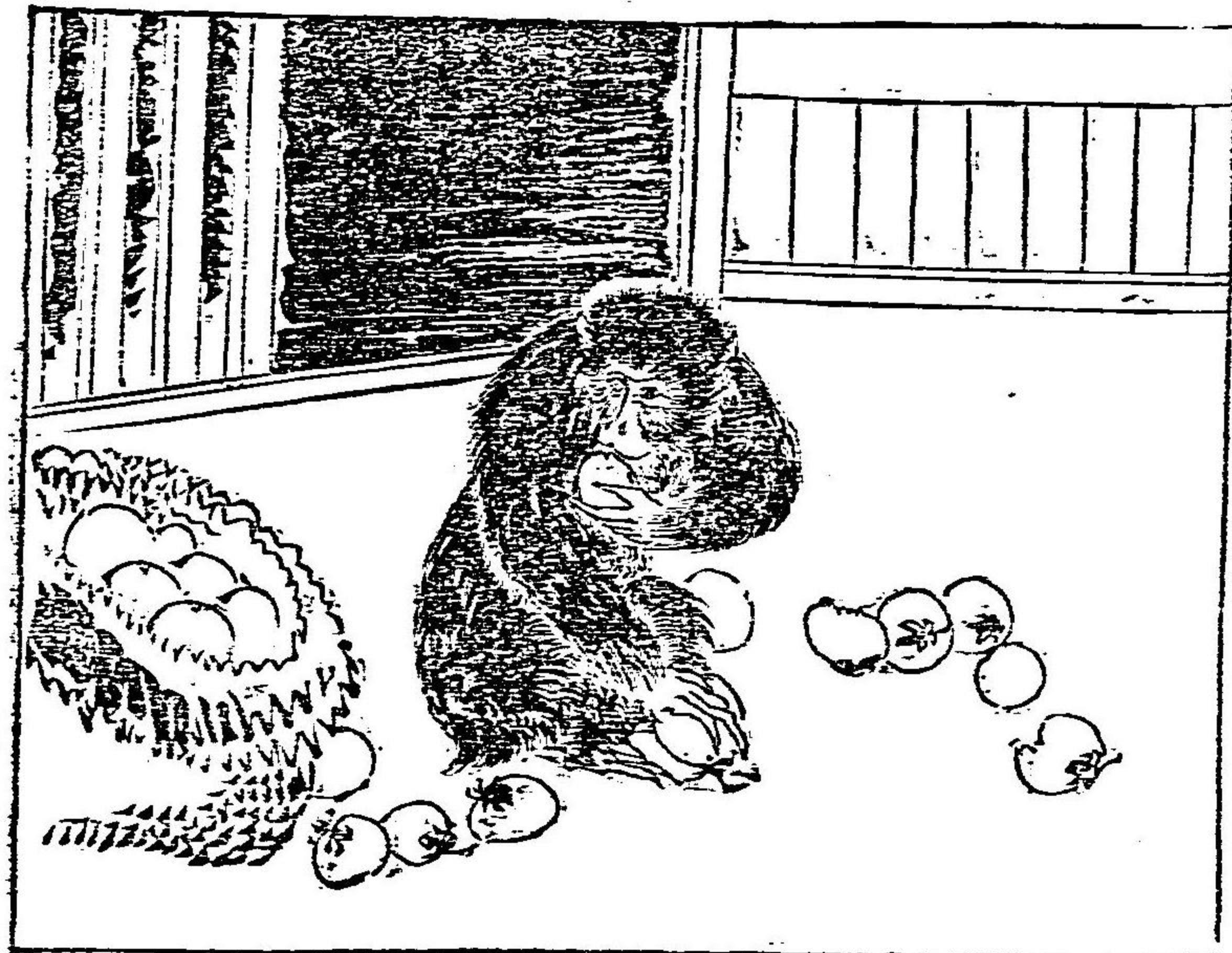




人である心と口と同一なれば誰れが無沙汰で逃げませ  
うと答へいと云ふ。  
諸子よ万物は長と云える、人間でも心と口とが合え  
ぬから畜生からまで笑はれます佛の御説て承まはれ  
ば心と口が違ふものハ未来は地獄に苦患を受けて舌  
を抜かれぬばならぬと云ふ何と恐るべきことならぞ  
や彼の口では忠君とか愛國とか又え佛法信者とか  
立て、心の内てハ名譽を取らんが爲めの野心にあら  
ざれば利益を見んが爲めにする者の如きは鬼社會よ  
り笑はれてを實に仕方のないたと云はぬばならぬ謹

一まざりべからず

猿に留守を頼んだ話  
或柿屋の主人猿を飼居た  
り一に行儀正しくして更  
に柿を偷まざりかば主  
人え安心して留守を任せ  
出て二三日を経て販り來  
り見れば柿は残らぬ猿に  
かまれ居たぞそこで主人





は後悔して云ふ様、あ、吾は馬鹿なことをしたもれだ。柿  
ハ猿の好物あるよ之に留守を頼んだとは。  
我々人間にても悩煩と云ふ猿に任せて置く時は「どん  
な」大變を引き起すかも知れないものです。佛は此悩煩  
こそ吾人の大敵なれば油断すべからざとて返すく  
も御教誡あらせらるゝことなり。全体此心と云ふもの  
ハ心猿意馬として狡猾なる猿に如く。又活潑なる荒馬の  
如きものにて。少く油断をする時は。我身の勝手斗りを  
計り。罪なき人に迷惑をうゑ。他人を苦しめ。社會を紊す  
様の大事を出かすものなり。そこで佛敎にては。此悩煩

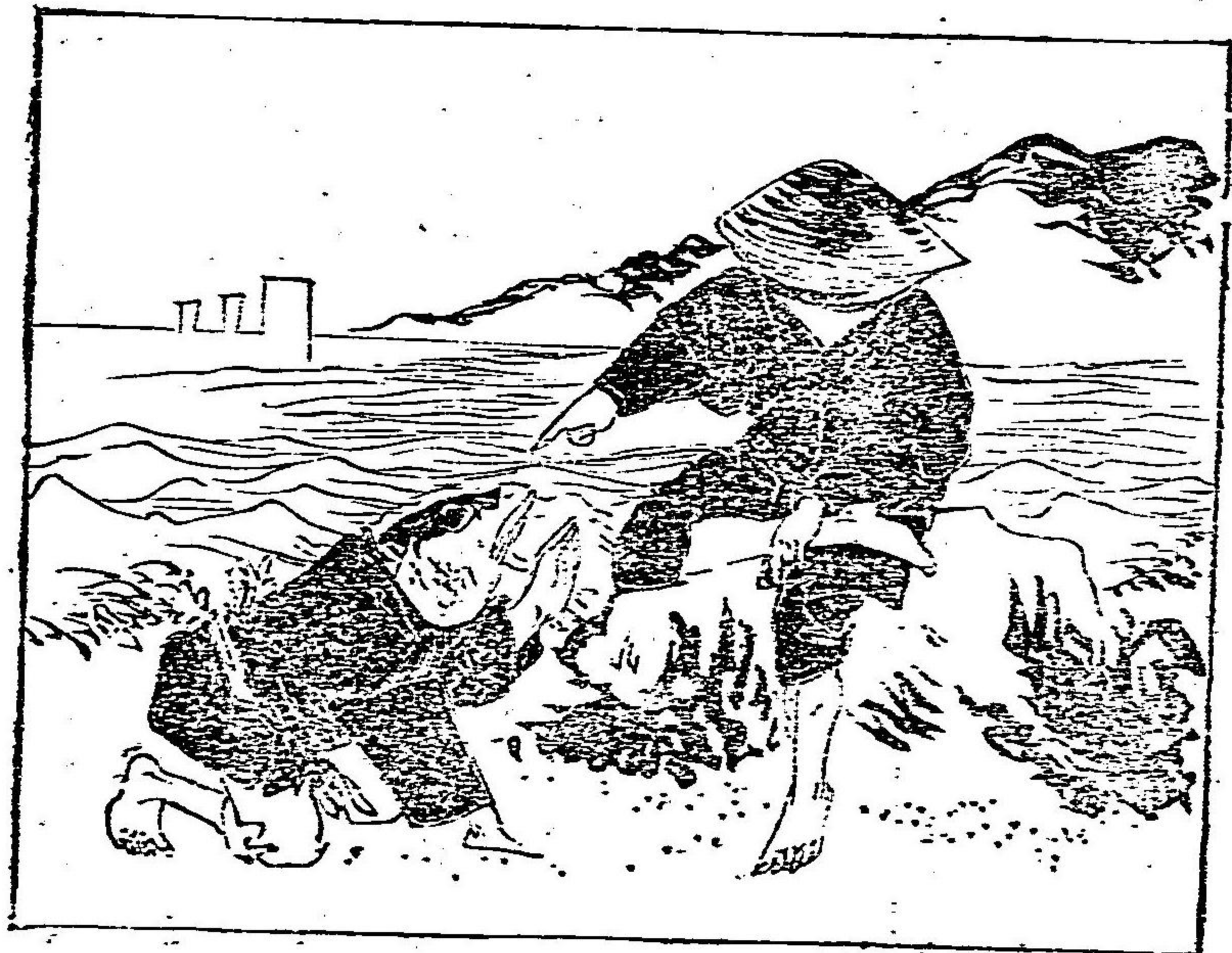
と對治することとを勉め。世に所謂己に勝ことを教ゆる  
なり。若く能く煩惱と對治し己に勝たば天下は泰平に  
治り。御上の手数を煩はすこととなく。富國強兵乃彼岸に  
到ることと。丁度日を見るが如く明らかなるものなり。  
日本の少年夫れ之を勉めよや

蛤と鰐の話

或る海邊の砂濱に蛤が遊び居り。己れの甲の堅を頼  
み自慢して鰐に向て云ふ様。汝等に私が如く丈夫なる甲  
の要害がないや。油断をすると人に取られる御要心あ



されと最と誇顔にて語  
かば鰯は道理にまゐて何  
とも云えど眼をばちく  
させ黙りて居りたりしが  
俄に人の足音がするゆへ  
鰯は一生懸命な水底に逃  
げ込み蛤は此處が伎倆の  
現は一場として早速右乃甲  
蓋を閉ぢ自ら思ふ様先づ  
く之れで安心なり定め



て彼れ鰯等は捕らへられたであらふが氣の毒なことな  
り併し已れさへ捕らへられねば鰯の身の上のことまで  
心配するには及ばぬとして稍暫くして最人が逃げたるな  
らんと思ひ蓋を開て見れば豈に圖らんや自分の身体は  
魚屋の店に并べられ一つれ價三厘と云ふ賣札が附けて  
あるれを見て大に驚き後悔乃泡に咽びたれども仕方な  
かりしと云ふ

此の後悔話には決して蛤のこと斗りにあらざ吾人人  
間に於ても度々あることにて彼れ地獄が無いとか鬼  
が居らぬとか云て自分勝手に安心して誇り顔に言ひ



癡す者は丁度彼れ蛤が甲の要害を自慢して店屋に并べ立てられてから要害の宛にならぬことよ氣が附いたと同じ様を者よて死んだ未來て氣が附き斯様を恐るゝい地獄があれた様なら佛教を信じて置けば善かつたに。斯様な苦痛があれたから惡事をせねば善かつたよと地獄に行きた後に佛法を信じなかつたことを悔みたり。又は監獄に縛られた後に惡事をしたことを殘念がつても何の役にも立つもれにあらず。斯様な後悔者の事を俗に蛤安心とこそ名をたり万物の長たらんとする人は深く慎べきことよもなり

獅と鼠の話

獅は百獸の王なれとも怪我をした時には仕方ないものと見へて或時咽喉に大きな骨を立て大困却して居る處へ鼠が走せ來り最と氣之毒らとく眺め居りしに獅云く鼠公汝の身体は小さらぬら己の咽





喉に這入りて此の骨を抜き玉へ御禮を澤山にするら  
と鼠ハ早速承知して程能骨を抜き取りたりしに獅は得知  
ぬ顔志て一言半句の御禮も言ざりしは鼠は大に腹を  
立て若し獅君御禮は如何と云ひければ獅眼を瞋し叱し  
て云く御恩知らざめ汝の如き小獸が己の咽喉よ這入て  
無事と出るとは夢よも無いものを一命を助めて貰ふた  
御恩を忘れて其上に御禮を貪ぼるとは捨て置き難しと  
踏み殺せしと云ふ

凡て他を助け救えんとするに當て御禮を的より報ひ  
を貪ぼる時は却て禍を我身に招くもれなり斯る淺間

敷野心を以て慈善家らしく誇顔を振るたがるのは濁  
世末代の有様なるが佛様は御慈悲は斯様は水噴き御  
慈悲にあらず我人凡夫が迷界に沈み曉けても暮れて  
も三毒の煩惱よ苦しめられて後生の大事を打ち忘れ  
居るのを不愍に思ひ給ひ丸て御自身一己に御引受  
あらせられての御慈悲であるから此の御慈悲を貰ひ  
受けたる吾人は又此の佛の御心は如く清淨なる慈悲  
心を以て世間の人よ交はらぬばからぬ左すきは吾身  
も賞められ人をも喜ばし免両手に花を得らるゝこと  
せず



蟹と蛙の話

山間の溪川に流きよ沿ふて何か食物を尋ねつゝある一疋の蟹ありし偶々蛙が飛び出で蟹に向ふて云ふ様。汝を何故よ横まに歩むや真直よ行くことを知らぬから己れが教へてやる是れ看よとて最と活潑に飛んで見せられれば蟹は大に腹を立て云ふ様己れが横よ歩まうが縦よ行ふが汝の世話にはならぬ且つ汝を元來眼玉が後ろに附てあるから万事反對に見て居るゆへ今己が縦よ歩むのも汝の眼から見れば横よまに行く様に見へ

るぞあらふ少く自身を省みよとして双方大喧嘩を打ち初めて居る處へ樵夫れ老翁が通りかゝり此の喧嘩の裁判をして曰く蟹公汝の横に歩むと云ふのも真かり又蛙君汝の眼玉の後ろにあると云ふれも真なり故に双方共に誤れり然るに自己の誤れること





と知らざして他を笑ふは以て此外の事どもを他乃誤  
りを正さんと欲せば先づ自身を省きよと蟹と蛙とは此  
裁判を聞て大に感心せよと云ふ。」

吾人人間社會に於ても亦此れ通りでありて他人の事  
斗り見る時は中々穴の見へる者にて某は悪人である  
とか奸者であるとか評すれども退ひて我身を省みる  
時は左程他人の事を云はれぬものなり然るに世よは  
我身悪しと思ふ者無きゆゑ動もすれば喧嘩が起りて  
一軒の家に住み乍ら修羅道の様なる日暮しをするも  
れもあるとならば御互に氣を附けぬばあらぬことか

り昔一慧燈大師と申す御方の御教へに「我身は悪きい  
たづら者と思ひつめよ」とあるが此れ心得にて佛の御  
慈悲を信じ以て君に仕かへ父母に仕かへ朋友に交は  
るならば決して仕損じと云ふことはなきなり。何卒御  
互に佛敎の大道理によりて我慢邪見を剝き取り日々  
に我身を反省みて美しくく世を渡りたき事にこそあ  
れ

畜生も恩を知話

昔伊豆の國にて或地頭の年若き主人あるが山に入て狩



をせらるゝ時、猿を生捕て連れ返へれり。柱らに縛り附けてありけるを。其の母の尼公これを見ていたわしき事にぞ家來ども早く繩ときて山へ返へしてやれと云ひ玉ひければども主人の下知にあらざれば恐れて繩を解ものか。尼公みづから繩を解て山へ返れとて追ひやられけり。これは春の事なるに夏にかりてより覆盆子を柏の葉よ包みて人の見ぬ間に持來れり。あまりよほらしく憐れに覺へて布れ袋に大豆を入れてやられけるが九月にかりて彼の袋に栗を入れて持來れりとぞ。其の恩をとりたること。人間の義理順義の名聞にはあらざる實意なること。

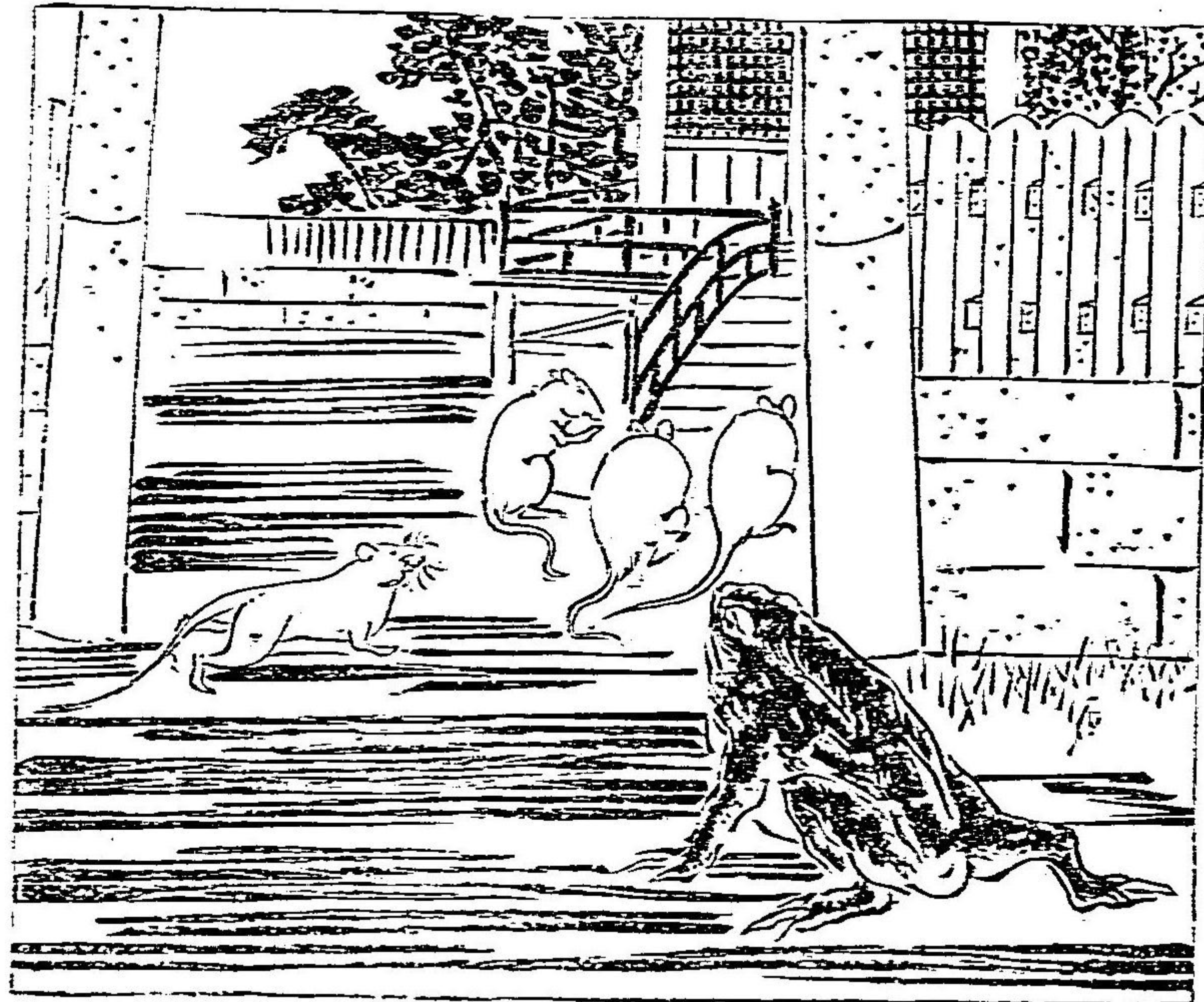
と思ひやるべし。春のことを忘れざして覆盆子がいるみたらばと思ひ暮せ志も猿の境界よて人間に呉れる物なければ覆盆子のいろむを待たるものなり。又た豆の袋を失はばす山の中にて破りもせど栗を入れて來りしは恩をわすれぬ心根の思ひやられたることどもなり。斯る心のある物を子々孫々の末までも殺すまじくと起請を書きて謹しめと若き子息よ云ひ聞かせられ家の掟と玉ひて今の世までもその掟の尙それ國にれこれりと云ふ。未來永々劫の一大事を御助け下さるゝ西方大悲れ佛の恩を忘るゝものは實に何とも名れ付け方なき徒らも。



のなり謹むべし恐るべし

附録

鼠ねずみの猫退治願ねこおとしねがひ (慕ほめるの意見いけん)  
 昔むかし或あるる所ところに利生りきやうあらた  
 なる観音堂くわんおんだうありしに毎まい  
 夜よ々々數多あまたの鼠參詣ねずみさんけい  
 南无大慈大悲なんむだいていだいひの觀世音くわんせいおん  
 菩薩ぼさつ千せんの御手おんての弓矢ゆみやを  
 持もて怨敵退散おんてきたいさんなさしめ  
 玉たまへ南无大慈大悲なんむだいていだいひの觀くわん  
 世音せいおん菩薩ぼさつと最さいと高聲たかこゑに  
 祈いのりし椽せんの下したから





二) 少年佛教脩身なま

墓が聞付。そろく。と這出て。鼠へ向て云ける様。御前方ハ  
觀音様へ何を祈のかと。數多の鼠口をそるへて。いや墓殿  
ろ久しぶりに御目にかゝるが。いつも御無事で目出度ご  
ざる。我等は又登れに引かへ。此頃大きに難儀な事が發つ  
た。聞て下され。そなたも豫て知る。とふり。我等が代々住  
家ハ。此邊での大家なれど。亭主が代々猫きらひで。猫を畜  
た事のない内ゆへ。我等は何の畏もなく。數多の子をうみ  
孫ももふけて。塵功記にあるやうに。曾孫玄孫月々年々に  
繁昌し。是家には猫さへ居かけにや。世ざかりくといふ  
歌を諷ふたり。餅を搗たり。輕業仕たり。さまぐの樂み暮

三) 少年佛教脩身なま

しを爲をつた處。此頃旦那が何を思ひ出したや。俄に猫  
を飼初。殊に其猫めは鼠を捕事大上手で。吾々は親をと  
られ。子をとられ。娘を喰れ。女房をころされ。いやはや大變  
な事ぞござる。是を此ま、捨おくと。我等も又同じやうに。  
悲しい最期を遂ねばならざらばと云て。あの猫を退治  
しやうといふ事ハ。我々が力にはとて。及ばぬ事じやゆ  
へ。此上は。神佛の力を借より。ほかには仕やうハないと。鼠一  
統申合せ。觀音様へあゆみをはこび。猫退散を祈るのじや  
と云ければ。墓え両手を突か。がら。愚鈍氣な顔をして。ふん  
それからは。鼠どの御前方乃身のうへで。此上もない恐る



少年佛敎脩身なほ (四)

一ひ仇敵となるものは、只その猫じやと思はるゝかと、聞  
くに鼠はみか口を捕へて、やれく怖やをそ恐るゝい廣い  
世界に我々が身を亡す敵とあるも乃ハ猫より外にはど  
ぞらぬといへば、墓ハ大きな口を開け、只があくと笑むな  
がら、さてもく御前方は、おろかな事を云るゝものか、  
御前方の身の上ではなるほど猫もを控るゝかろふが、其  
恐ろしい猫よりも、まだをそるゝむ悪いものを御前方乃  
銘々の身に持合して居らるゝが、それにはちつとも気が  
つかぬが、人間の世界でさへ、利口なものや發明なもの、は、  
白鼠じやの、いや鼠鼠じや乃と云ひますげなが、それ程か

少年佛敎脩身なほ (五)

一あゝ御前方が、我身に附た敵ハ知らぬ猫ばかりを恐  
らるゝ、は、ざりとを笑止む事で御座るといひまゝたれば  
鼠を只さるゝくして、それは何とも合點が参らぬ、あの恐  
しい猫よりも、まだ恐ろしい悪いものが、我々が身に附て  
あるとは、そりや又何の事で御ざるか、と問ひければ、墓を眼  
を、はちくさせ、其恐ろしい敵と申すは、何にも別乃物では  
ござらぬ、御前方の口の中に、二本づ、附てある、錐のやう  
な尖い齒じや、あれが御前方の身を亡す、恐ろしい敵じや、  
ほ  
どに爰へ来て、觀音様へ、猫の退治を願ふより、まあ其向齒  
を抜て捨るがよいと云ひければ、鼠は一統口をそるへて



少 年 佛 教 脩 身 法 則 (六)

そりやいよく合點がまいらぬ我々は口の中にあの強  
ひ齒があればこそ戸障子でも喰貫たり正月餅の堅ひ乃  
でも何の苦もななくしてやるから命もつかいで居るとい  
ふも乃とすればあのつよひ齒こそ我等が爲の身の寶  
劍それにあの齒を敵とはそりやどふも合點が行ぬと語  
りよかば蟻は咽喉を動さながらいや鼠殿左様は参らぬ  
昔一から猫を飼れぬそちの内に頭に猫を飼出したハど  
ふした譯ぞと能其本を推して見られよ御前方の齒節が  
あんまり壯健ながら發つた事じやござらぬか正直に自  
身の道を守つて人間をさす毒虫をとつて喰たり人の妨

少 年 佛 教 脩 身 法 則 (七)

げにあらぬ様にさばれも乃や捨りも乃を拾ふて喰て居  
るなればそちの内に何のまゝあ嫌ひな猫を飼ませふそれ  
に御前等が我儘も齒節を強を頼にして腹の足にもなら  
ぬ事に筆笥長持へ穴を明たり戸障子を喰ぬひたり飯櫃  
や重箱をかじつたり書物や掛物に疵をつけたり人に對  
してさまぐの惡業を其上少しも憚る氣色もなく天  
井を駆け廻つて人乃頭へ小便したりキイ〜チウ〜  
太平樂をせらるゝもへ今の旦那が是ではたまらぬと嫌  
ひも猫を連れて来て飼ふ、様になつたのしやをすれ  
ば猫より恐しい身の敵とさるも乃は御前方の向齒じや程



にあの向齒を抜て捨て已來はちと長うするがよいと  
すれば仁者に敵かゝにやんにも恐しい事は。ござらぬと  
申たれば鼠は一統尤もと感心。嗚呼大賢は大愚のどと  
しとやら之迄を御前達を。只愚るなものとはかり心に侮  
りて居りしに床の下に生れながら何時の間にも學問して。  
左様か道理を悟られたかと問に。蟻は高ぶる氣色もな  
く。慙懃に手をついて。いや私しはもとより賤しひ身分。其  
上愚鈍なものをなれば。學問する事もならぬぞ。其處の道  
理は從來の經驗して知ります。御前方も御承知の通り  
私が家筋ハ先祖からの叮嚀筋ゆへ第一誰殿の前へ出て

も。斯の通りに両手を突て。ついに一度も腰を伸した事も  
ござらぬ。其上夏の暑さの頃は椽の下も苦痛をゆへ暮頃  
にもかりますれば納涼かたくそろく。這て出て。前際  
で納涼て居れば。危相かゝい。おさん殿に。頭をぎゆつと踏  
る。事も御座るが。其時は私でも眞更腹の立ぬ事も御座  
らねば。エ、此おさんめ。已れを恰ぞ。已がやうに。脊に眼が  
附てあるか。足下を見てあるけと。いそふかとも思ひます  
が。いや。是もさふではな。何故なれば。我居るべき様  
の下に屈てさへ居たならば。こんな憂目に逢もすまいが  
爰へ出たばかりに。頭をちよつとやられたのじや。さすれ



は罪は五歩くじやと心てこゝろを警めてぐつともい  
えづ堪へて居りませ。又子供衆のなぐさみに折々たばこ  
の吸滓を吞される事も御座るが是は又熱ふもあり辛ふ  
もあるゆへ。エ、此子供めはなぜ其やうな悪ひ遊びをと。い  
はふかとも思ひますが是もよく考へて見ますれば  
やつぱりこちら不調法なれば初から喰る、もの  
が喰れぬものか。とつくまに見定めたうへ喰つけばよか  
つたに。あんまり狼狽へて喰ついた也へ。こんが辛む目に  
逢されたのじや。さすれば是も半分はこちらから手傳ふ  
たのじやと了簡して。何とも云はせ。吸滓を吐出して眼ば

つかり白ふいたり黒ふいたりして堪へて居る。又た食焚  
のお杉殿が米を浙る、時糠の粕でも貰ふかと井の元へ  
這ふて出て白水の流るゝと丁度屈て待て居れば意地乃  
わるいお杉めは態と私か頭の上へ白水をさぶさかける  
其時は目へ滲て痛ふもあり。うるさふもあるゆへ。エ、此  
お杉め。こりや己れをさぶさぶと云はふかとも思  
へども。いやく口は禍の門とやら爰が大事な辛抱どこ  
ろと。眼玉はつかまくるりはとひつくりかへして。おつと  
堪忍して居ります。其とふり何事にも身を懲り己を責て  
眞んで居ますゆへ。世界中に怖ひものは何れも御座らぬ其



眼から見ますれば御前方乃利口發明もあんまり譽られ  
た事でも御座らぬと云ふたと申す古い話が御座りませ  
が何とをいへるい話一じや御座りませぬかなるほど世  
界中が此蟻のやうな心得になつて只己に克ことを常の  
仕事に仕て居れば善いけれど誰も此鼠と同じ事でも  
れが我儘や身勝手なる心の恐一も事にはちつとも気が  
附ぞたゞ向ふばかり恐れて逃げ廻るものが幾等もある  
ものじや是等ハみか彼の鼠の御仲間じや自身にさへ惡  
ひ事でもせぬば何もこまひものはなひ蟻の説諭は尤もの  
事どもあり

佛教に此の世界のことを堪忍の世界とあるのをつま  
り此の蟻の様な心になりて世を渡れとのことなり世  
の鼠連中は深く慎むべきことどもあり

兎と猿と墓の餅搗話

或時兎と猿と墓の三疋が山の上にて餅搗を始め一に兎  
は搗人となり猿は杵取役となり一も墓斗は何もせざに  
其側に考へ居り志が彌餅が出来一時に兎と猿の二疋が  
云ひける様墓は何にも手傳はざる故へ一つも食せまひと  
そこで墓が云ひけるには各位が働き居る最中に獵師が  
来たれば如何せらるゝや己は其番を爲せ志なり各位の



命の親ともなり  
一は。曰じや。其餅  
三割して與へら  
る。は。當然のこ  
と。ども。かりと。此  
の理屈には二疋  
も大に閉口。猿  
と兎が思ひける  
様。我々は。山路を  
歩む事ハ得手じ



や。墓は無得手の生質なれば。之れ一度困いたらんにはと。  
猿が發議をいだして述べける様。今三割に分けるも面  
白からぞ。此餅を白の儘谷底へあるば。早く往ひて喰勝  
にすべしと。兎は随分走る事の上手なる方の事なれば。早  
速同意たりしが。併し墓は心に大に不賛成なれども。二  
疋と一疋の事なれば。詮かたかく承知せり。扱て山の上に  
て。白を轉すや否や。兎は一直線に谷底へ走せ下り。白の來  
たるを待ち受しに。白は段々重力を加へて。谷底の方へ落  
ち來りし。かば。兎は氣乃毒にも前足二本を折られ。猿も亦  
餘り周章て下りし。かハ。折々尻餅を搦き。唇を摺削て。猿と



鬼の二疋は共に大怪我をせしとぞ。又た后に墓は、汝泣き  
りく。と。静に出掛けし。かば。如何せん谷底へは。白計り  
落ちて餅を皆途中へ遺り居たれば。墓は大に御馳走じや  
と申して皆一疋で喰ひたりし。之に依て今の世まで。鬼  
は前足が短かく。猿の尻ハ眞赤で。墓の腹を飢饉年でも脹  
て居ると申すことなるが。凡ての事が狡猾なる猿智慧では  
事を仕損じますれば。矢張墓乃如く何でも両手をついて  
長なく。道德の方でなければ。成就する事は六ヶ敷きこ  
となり

宗教の事でも。其通りであり。而して。耶穌教が善いと云

へば直に耶穌となり。神道が好いと云へば直に神道と  
なり。早智慧を廻して。周章て廻はるときは。とんでもな  
き大怪我をなして。地獄乃鬼の餌食とならねばならぬ  
事となり。ます。好く。心を静めて。此宗旨は如何した  
ものか。彼乃宗旨は外道ではなきやと。考へねばならぬ  
せぬ

鏡を知らぬ人の話

昔ト鏡をいらぬ田舎人が都へ上り。ふと鏡屋の店先を  
見れば。何やら光る物があるに。気が付き。不思議さうに打  
ち詠がめ居たりし。俄に大聲あげ。ヤレ親父様をかづか



いと。其鏡を捕へければ亭主きもを遺し。これは如何と  
つゝやるのじゃ何や如何とませぬ。是は此方乃親父様  
じゃ、免つさうな其は此處乃賣物じゃ、何に賣物の賣物か  
らば買ひませうと、代金を拂ひ彼れ鏡を宿屋へ持かへり  
扱て言いふて見ても返事せぬ。是は娑婆と冥途の隔があ  
れば、聲が聞えぬさうな。何にもせよ死に別れて二三年目  
に御目に掛かると曰は難有事じゃと。我が影とも知らざ  
悦んで國元へ持て歸り。ひそかに二階の長持へかくし置  
き。出入に二階へ上るとある時女房用事ありて二階の長  
持乃蓋を明て見れば光る物が目に付き取出て見れば甘

五六の女が居たり。そこで是も又びつくりして二階か  
ら飛んで下り亭主の脚先をつかまへて泣くやらわめく  
やら悋氣喧嘩が始まはたさうな。何處で隣の妙琳となん  
呼べる尼が聞付て挨拶に來りければ彌々喧嘩に花が  
咲き妙琳も詮かたなく。されば私一が二階へ往て男が女  
か見届てきませうと。二階へかけ上つて鏡を見れば。之亦  
びつくり大聲あげて云ふ様。御前方があまり悋氣喧嘩を  
するから。二階の女中は尼に成られましたと  
此の話は狂言にも見ることあるが。随分面白い趣向じ  
やないか。とつくりかこめて御覽じませ。兄弟いさか



夫夫婦睦は随分澤山有るものなり。或人の道歌に  
よし悪のうつる鏡の影法師能くく見れば我すがた  
かりとあるは實に此乃ことなり  
无宗教の人が初めて宗教を聞くのは丁度此の鏡を知  
らなかつた人が初めて鏡を見た様を者でありて我機  
のつまらぬ事を聞く時ははびつくりする者なり。左れ  
共能くく詮議をして見る時は教の鏡は我機様のを  
りを寫したる事に氣が付き。宗教の大切なることが知  
れます。希くは誰人も宗教と云ふ鏡の價値が知れる迄  
て宗教を聞いて貰ひ度きものあり

不孝なる子息鶏よ騙されたる話  
昔一或る處に不孝なる子息ありしが我儘勝にて母親の意に従はざりしがば朋友どもが氣之毒に思ひ或る先生の方へ道話を聽聞に連れ行かれしが其夜の道話に或る國より孝子ありて家貧かりしに親子共に大病よ





罹り既すても覺あしとなり身体意からだいも任せまかせ殆ほとんど餓死うへも及およばんとせしに。孝心こころの程ほど天てんの感應かん応ありしや。一日いちにちの事こともか。近あた隣りんの鶏にせうりつ土塊つちまを啄くわへて彼の孝子かうしの枕邊まくらべに運はこび來きたれば病びやう人は不思議ふしぎも思おもひ碎くだき見みるよ。古金ふるきん一步いっぽを得えたれば親子おやこの喜よろこび一方ひとかたならざる斯かる金きんを以もつて藥くすりを求もとめ病やまひ漸ゆるく快復くわいふくして剩あまつさへ殘のこれる金きんを資し金きんとし。大おほみ家いへを興おこせしと云いふ話はなしありしかば彼かれ子息むすこも大おほき感心かんしんしたりし。我家わがやへ歸かへり母親ははに向むかひ云いひける様よう。私わたくしも従これ來から孝行かうこうする程ほどに鶏にせうり二三羽にせうり買かひ玉たまへと母親ははを大おほきに喜よろこび云いひける様よう。隨ま分ぶん孝行かうこうし玉たまふえ宜よろしきことなるが。其その鶏にせうりは何なにれ用もちぞや。鶏にせうりが孝行かうこうの手傳てづたひ

にはなるまし。殊ことに斯かる米こめの高直たかぢかなるにはと。子息むすこ云いふ様よう。さふ八釜やちま敷し云いはれてハ孝行かうこうを出來でまはじ。老おいては子こに從したががふは當然たうぜん乃なことかり。早はやく買かひ玉たまへと母親ははも詮方せんかたなく買かひ來きたりし。子息むすこは喜よろこび舌打したうち鼓からして鶏にせうりを呼よひ。餌えを興あへ。彼かれ一ヶ月斗ひとかりにもかりたれ共とも土塊つちまを啄くわへ來きたらねば。子息むすこ大おほきに氣きを鼓舞いち去さりとは目めれあかぬ。鶏にせうりよ是これ程ほど私わたくしが孝行かうこうするのに自分まれ目めも掛からぬとはい。加減かへんよ目めを醒さませよと。鶏にせうりを捕とらへて小言こごを述のべければ。鶏にせうりも實げに氣き之の毒どくも思おもひけん。一日いちにち土塊つちまを啄くわへ來きたりたれば子息むすこハ悦よろこび是これは大だい分ぶん大おほなる塊かたまりよ。小判こばん歟や將まさに二步ふたふたならんと。碎くだき



見れば蚯蚓が出てたり。そこで子息は肝を壊し。如何な時  
節柄でもせめて一朱位は有らんものを。此奴を何じやと  
睨に付け叱かりたれば鶏も感よさまりにや。大なる口  
を開ひて「ベツカユウ」と啼きたり。とぞ何んと面白き話  
ならまや。家業もせまいて金が欲しく。悪き身持を善き所  
に嫁ひたり。遊びながら甘き者を喰ふたり。博奕を打つて  
譽られたひと思ふ人は皆な「ベツカユウ」に遇ふ連中じや。  
此の無分別を止め至善の場は止まり玉へかし。  
自分の心から出てざる事柄ハ何事も程能く出来ざる  
れみからま却て損分を招く者なり。佛教は名聞利欲を

爲めよ働くことを御叱りなさる。乃は畢竟此事なり。  
若し佛教の眞理に依りて孝道を盡せば。天地も感動す  
ることえ請合ひなり。

孝の道とるべ

希々人と生れし果報には	もの、つかさときくからに
たゞふたそやのだいさんど	しらすにはん哺の孝もあり
ほとにさん枝のれいもあり	はくせきならぬとて
ひつじはち・にひさまづく	おとりはしたるものときく
ううなきものはてうるいに	およびたへたることをなれど
うらやまとのゆう子とん	



すこーはーりてち・は・の  
ふおきめぐみをむくふべー  
いまこのやふに身を持つて  
西や東も辨まへて  
あついとむいも身におぼへ  
家業よくぶんするまでも  
たれがえだて、誰が養ふて  
生れ居るぞともとさびや  
みかふたさやのそんめぐみ  
我が身のうへとたづぬみよ



ち・あらざればうまれ得  
それち・はあめは、はつち  
めぐみあはれみたまいぬる  
文字やまと葉にのべがた  
も志も我子にあたらふかと  
十つきがほどのうきおもひ  
いたみくるーみふーくや  
氣もうーさいいきーにの  
ーち夜のうちはまくらとも  
ひやくにち百夜いみのうち

は・あらざればやーおはじ  
いたゞきよりもあーまで  
慈悲の御をんはるがーに  
まだたいないにやどるとり  
ーとく物までに氣をつけて  
うまる、ときにのぞみては  
ほねくーまでをとけはなれ  
さかいにいたるくるーみぞ  
せまともたれて夜とあか  
ーよくの養生身のきやう儀



そのおんきんのうき昔らう  
 ふたつ三つのあるまじは  
 たゞふところなきふー  
 ー、にぬれたる蒲とんには  
 子どばねさせていたはりの  
 またー、ばぐのけがれもの  
 と海のつめよはことぐく  
 これどもを覚えていといふく  
 身よきるものほぞくや  
 たゞよきほどにかみこさー

このきんらおとむくふんき  
 にーも東もーらぬ身て  
 志、ばぐたれつ乳とあまー  
 は、のいねつ、おはけるま  
 ふおきめぐみのおま忘れま  
 とりあつかいにとほのゆな  
 ふじやうのけがれ去やらま  
 たゞいとさーみたほひにき  
 またくいものまじはいや  
 あついつめたいことまでも

みかこ、ろみてーんせつよ  
 そのたいおんはいかに志て  
 た、子のためとともふより  
 よききぬあればわれをきぞ  
 あじよきもの、あるときも  
 見てたれーみとーたまひつ  
 むねうちとばきとるものも  
 熱いおひぬるおむなごころ  
 ふところひざうたきお、  
 ものをーして目せんご

めぐみやーなひたまひぬる  
 ほぞじつくさんやうもな  
 まが身のこととはとすれつ、  
 まづ子にきせてよろこびて  
 まぞ子にあたつよろこぶと  
 子のなくこつとさきくときハ  
 とりあつまーて乳とふくめ  
 はらおいたらおおむらおと  
 手合く明くと手品て  
 ひと、なるまばたのーみに



志なほ身脩教佛年少 (十三)

その苦ろうおもらへり見ぞ  
 いるそのはぢのまほばせも  
 わが身にふることもぞとも  
 おもはでちごのはふよりも  
 ものいふやうにたれがしと  
 ものくふすべもしらぬ身に  
 そしのもちやうい・わんを  
 し・の仕やうやばくの世話  
 な・ツやハツのころよりと  
 師しやうを頼て手ならひや  
 ふたとせ三とせするうちに  
 うつりにけりないたづらに  
 なりもかたちもいとひかく  
 はやたつやうよあれがし  
 をれをたの志みそだては  
 く・めてくわせくちあかせ  
 もつこと随でもおし一つ・  
 さまぐなりしおんめごみ  
 さらんなかからくめんして  
 そるばんまでもおぼへさせ

(十三) 志なほ身脩教佛年少

すゑにいたりてひとらしく  
 思いはりまてもおし一つ・  
 琴の御おんをもちあすれ  
 くちきくやうよなり志ぞと  
 のたまふこともき・入れま  
 いとけなきよりち・は・の  
 そのひやく分一つかへなば  
 かみや洞とけも見たまはん  
 子どあえれみのふかければ  
 ひとことにてもがりそめに  
 たゞなれお志とおもふより  
 いたわりそだてたまひぬる  
 たゞわれひとり目もあいて  
 おもふおゆゑにち・は・の  
 ふみつけにするやからあり  
 あえれみそだてたまひぬる  
 すこしおんをさるものと  
 なにより角よりち・は・ハ  
 さもしほらしきこと葉をば  
 わが子がいづばやましくは



三十三 少年佛教脩身なま

とるこびたまふものぞ  
あまゆふなつものむば  
ち・は・た・た・無理なこと  
あるまのときやほうそつめ  
だいてあるけよ負ふてよと  
ふところひざにー・ばど  
わざするやうなち・は・わ  
よーあまでもわむむー  
おやにーのけーことあれば  
こむひとつにそのほろは

まーてこま〜氣をつけて  
いかによるびたまふらん  
のたまふてもそのむらー  
をりーもいたく無理いふて  
こけつまるびつなきさけび  
たれおけーほどむたひなる  
むだとあるべきやうもむー  
あ・るむたひざいくたひも  
おにはらたて・そむくべき  
みなことごときーるーめせ

三十三 少年佛教脩身なま

五けいのたぐひせんぜんの  
おもきつみとがむきことぞ  
けふのわざのみたいせつに  
こ・るた・ーくまことあれ  
ち・のおんをばたうきやま  
は・のおんぞばふおきうみ  
か・るたとくきくうは  
たぐち・はの御こゝあの  
たち居おきふー氣をつけて  
ち・は・さかすそのとがむ

ーかはあれども不かうより  
たぐ塵にひくに身をむめ  
をこたらまーつとめつ・  
ひじりのみちれおーにも  
ーも彌山はあほひくきとぞ  
さふめらひはなぬあかー  
あまよりくれにいたるまて  
やすまるやふに身をもちて  
こ・るなへかあからさかよ  
とさへあまはあまふとあま



たといはる見や遊むんにも  
 くれにははやくおつるべし  
 わが子おうちをらと一あそ  
 怪我あやまちはなむるお  
 あーきところへゆめぶるお  
 あんじたまへるものぞおー  
 ものあらそひや利くつめ  
 せいわうーやく白笛たい鼓  
 ひと人をたらきするまでの  
 たといんことれ葉もあらじ

ゆめをまぐとつげーらせ  
 らづ國のをやのこゝるねも  
 わが子のほを見るまでは  
 けんくを口ろん仕はせぬか  
 おねをちつめぞやまのらぞ  
 まして夜あそびさけすこー  
 つーみたまへ子たる身は  
 もの、音ゆるやき、と答て  
 そのだいおんはいかにして  
 ち、は、婆のえんつきて

此世をすまひりたまふとき  
 おくもいたせといはれーと  
 そのとき後へはかへらざと  
 無事そくさいにおそすとき  
 ねねとおーま身ぞくたき  
 いかにする共及ばざるらん

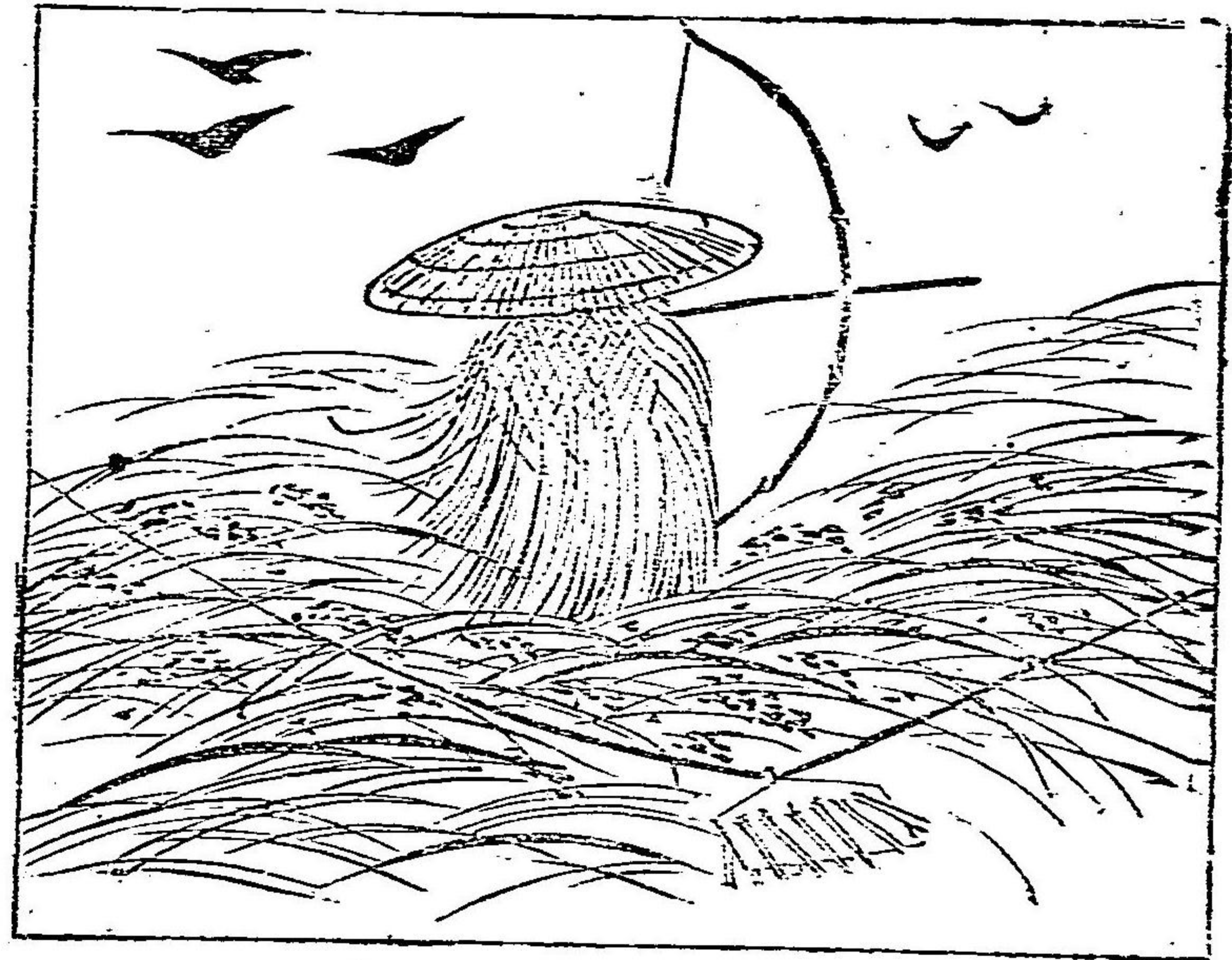
鬼ものたまひーこともあり  
 こうくわいすれど詮もかー  
 すこーは性根にうけこたへ  
 父母のあふせにーたおひて  
 つゝつゝ御おんほうじ

案山子の話

或る日案山子が獨語一つ、居るを聞くに世にも我れ程  
 馬鹿らーき者もあるぬいかに何故なれば他人よりも勉強



は勿論節儉を旨として頭  
 には敗笠を冠り身に破簑  
 と着て手に弓矢を持ち如  
 何なる寒暑も暴風雨にも  
 一のぎ夜も晝も田圃の中  
 に獨立して諸方に眼を配  
 り働き居るに今に何に一  
 ツとして獲物もなく未だ  
 我身の行末も定らぬ又誰  
 一人あつて尋てもおけれ



ば禮乃云ひてもおとて愁歎一居れりとぞ。

世間の人は渡世に就て節儉と勉強を以て或は商法に  
 付も日夜欲乃眼を張詰て我國にも殊に名高き鴻池や  
 三井様を豪商に成ても后世の幸福に氣が付かひ時  
 には持た金や貯た財産は捨置き世を去ねばならぬ去  
 ば后生の爲には案山子の如く晝夜勉強するも一物も  
 得ぬと云ねばかりませぬ此道理を古歌には「身を思ふ  
 人にそ實はわかりけれ憂るべき世の后を知らねばと。  
 又た惠灯大師の御教にまことに死せん時は豫ねて頼  
 み置きつる妻子も財寶も我が身よは一つもあひそふ



ことあるべからざれば死出の山路のすへ三塗の大  
河をはたゞひとりこそ行きかゝんぞれと仰せられたれ  
ば今世に於ける財寶は未來の役も立ちません然れば  
早く佛敎を信じて來世得脱の身となりて案山子の如き  
嘲を受くるとおかれ。

古の大徳興敎大師の御歌に

驚かま鳥はのこらぞ宿とりて

かゞりばかりの秋の夕暮

子守歌

念々稱名常懺悔懺悔がたらいでよろこべぬ喜ぶ心をあ

てにすな。あてになるれば御勅命勅命聞ひたら疑ふな  
疑ひあいのが信心じや信心一つで参るのじや参るは  
あなたの極樂じや

殊勝かゝる小娘

島根縣石見國美濃郡鎌手村大字木村百七十三番地平民  
田原道太郎娘みか(十六年)同村五十二番地田原たみ十六  
年(元)兩人は元從姉妹同士にて云何なる因縁のあらわれに  
や昨年七月頃兩人共頼み少なき世の無常をさとり頻り  
に出離れ大事が氣にかゝり共々語り合ふて云何よとて  
かりとも大安堵の身になりたりとて殊勝にも發心の志



頻りかりいども誰に尋ねてよからんやと思ひ惱  
み終に兩人相談しけるには此頃筑前の博多とやら難  
有和上様がありて御法儀聽聞の爲に諸國から寄り集る  
人も多きよし聞けば一層其所に行きて御教化を聽聞  
せんと決心し兩人共兩親に向て其趣きを述べ暇まを乞  
ひしに固よる海陸百里も隔てたる土地よして殊に兩人  
とを小娘の事なればいかでか親の許すべき去り乍ら兩  
人とも宿善の花の開くべき時節の到來せしにや寢ても  
寢めても出離の大事が忘れられ忍若之を猶豫して徒ら  
に月日を送りおぼ万却乃後悔なりと兩人共決心し七

月廿六日に知己の方より金壹圓丈けを借出し兩人共に  
家を出て七十余里のところ則ち馬關まで些少の金にて  
容易ならぬ艱苦嘗めたりし然るに其馬關の或る信者の  
方へ泊れたるに家主は其志しの殊勝を賞つ、兩親の許  
しをも受るぞ家を出ると云ふハ宜しからざとて種々懇  
ろに諭しけるに兩人は口を揃へて云ひある様元と出離  
の大事を求め聞んとて家を出でたる事なれば此事一決  
を安心させて下されたれば只今から直に國許へ取取ま  
すと男子も及ばぬ鐵石心には家主も口を閉じたりしと  
ぞ其後云べからざる艱難を嘗めて漸く八月一日に博多



に着て万行寺に詣り其様子を語りよかば七里和上を直に電報を以て此事を國許の兩親に通知せられたり然るに斯る身出度思ひ立なれば況んや心の暗の晴れざるべき一座の御法話聽聞の立どころに忽ち日頃乃疑雲を晴らし明信佛智と明かざる覺悟に基きければ兩人の喜びは云までもなく追々國許より迎ひ旁参詣たる人々まで有難き念佛行者とぞなりたりしと然るに兩人とも國許に販りて後は朝な夕なれ行ひは昔に増て兩親への孝養怠たりなく夫れ故へに佛法信仰の身となれば斯くも有難きものにやと次第に御法義に入る者も多かりしよと

然るよみかえ去年三月頃より病ひよる、り種々醫藥よ手を盡せども次第よ重くなりしが不思議なるかな去年八月一日則ち一昨年博多よて初めて聞法せし一週年に當る日午前十一時頃父に向ひ云ける様今日を私しも身出度往生致しよす故へ何卒御暇乞れ御勤を致度しとて口を嗽ぎ手を洗ひ正信偈御和讃より御文章まで拜讀し午後七時よなりたる時ハ念佛の聲諸共よ眠るが如く大往生を遂たりしと嗚呼眞宗れ念佛行者よ殊に三十年も先立て嚴敷無常れ鐵鞭をば身に當れがら今に驚る

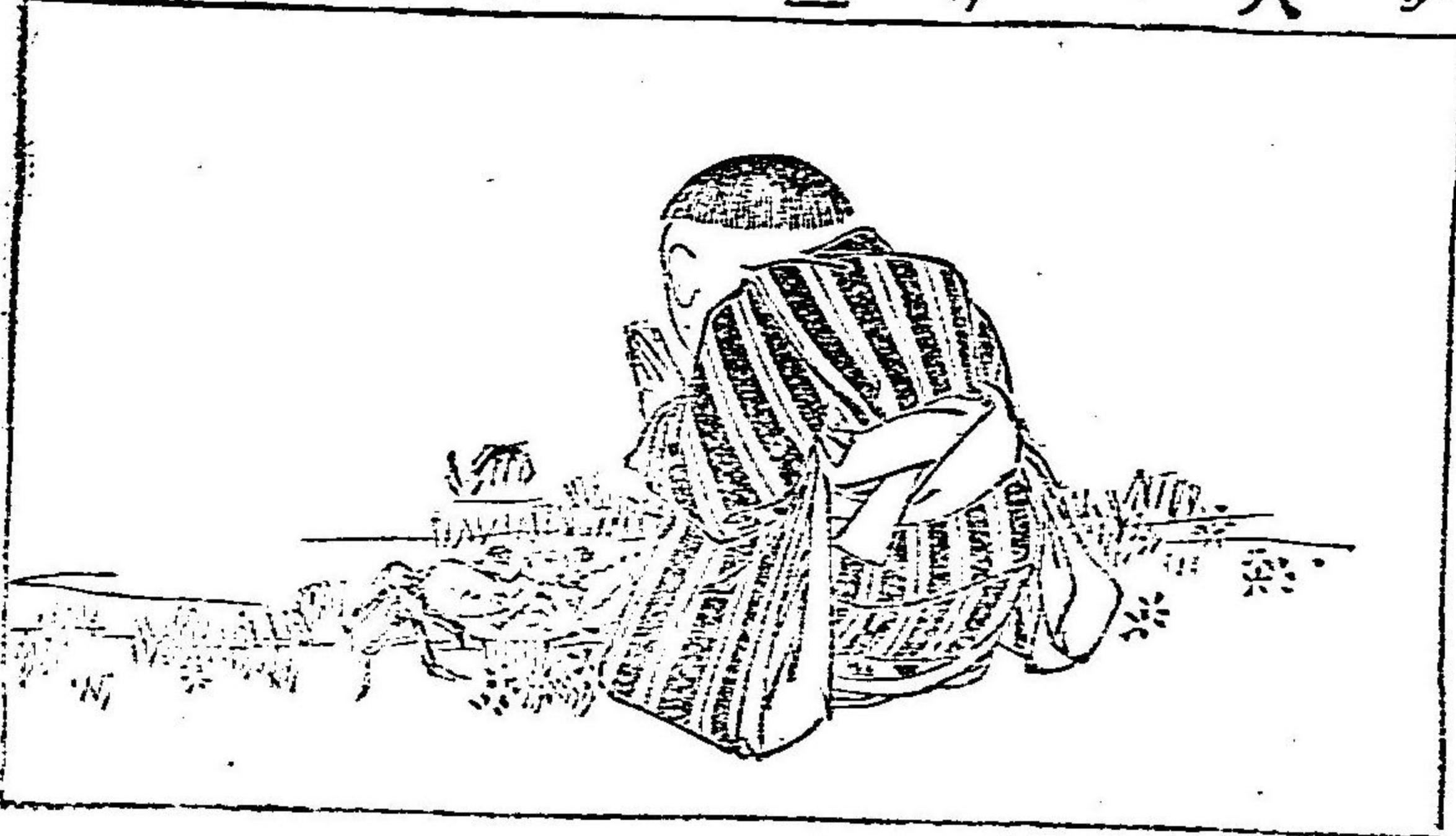


く氣色もなきえ無眼人よは非るか無耳人よは非るか少  
しえ顧りみる處るあま

子蟹不孝ある小兒を説諭せし話

或る谿川に住ける子蟹一日彼れ自身思ふ様殊よ天  
氣も長閑なれば永く我窟へ蟄せし鬱を散ぜん爲め近傍  
へ散歩せしものごとと決心しやがて我窟を立ち出でたる  
よ偶は親に不孝にして遊惰に耽ける小兒の遊べるに近  
ひ時よ小兒蟹よ向て云ける様汝は何故に横に歩むやと  
尋ねしらば子蟹之に答て曰く吾々は決して横に歩み居

ら老之れ我輩蟹の本分を盡し吾が  
道を直行しつゝあるかり汝こそ人  
れ子として親よ不孝を爲し行くべ  
き學校よも行かざ日々遊惰に耽け  
り子の道も守られざるは如何やと  
爰に於て小兒は復ひ返すべき言の  
葉なく黙し居れり又た子蟹小兒に  
向つて云るに吾々は晝の間は散  
歩して夜に入れば各我窟よ歸り父  
母に對面するを最上の樂となせる





が汝は幸に人生を受居ながら遊惰に光陰を費し何時  
か人命の晝が終て臨終に夜が來れば如何致さる、や  
と小兒は大に蟹の語に耻ぢ後悔の涙に咽びいと云ふ。  
諸子よ下等動物なる蟹てさへも夫れ己れの本分  
を守り其上我軀あるを樂み居るよ況んや万物の靈た  
る人間よいて人の人たる道も守らざ未來に行先靈魂  
れ販着に心を掛けぞ只目前に名利にのみ心を取られ  
一生を空しく過さる、人こそ氣の毒なれ深く我身を  
反省み玉はんとこそ願はしけれ。  
或る大徳乃歌に

横に行く蟹にも耻ぢよ我ながら

立かへり見る心なき身は

猿主人を助けし話

扱て横濱市伊勢町三十七番地荒木徳次郎と云へる人所  
用ありて同地戸部町のクラヤミ阪を通りか、りし時  
も横手に藪よ一匹の猿突然走せ出で、其裾に取付き  
兩手を合せて伏し拜む様れ如何にも不審敷れみか追へ  
ども去らねば同人は其儘猿と共に藪れ中へと分け入り  
たるに年齢四十五六乃男が急病にて艱し居る体なれば



取敢へど種々介抱してきて其子細ハ如何と尋ぬるに其  
男私ハ東京深川生れ浅田源藏とて猿回一渡世にて本  
月四日横濱に出で福富町に旅宿に泊り晝は猿を飼て諸  
方を稼き回り今日も保土ヶ谷邊を回りて歸る途中此  
處にて持病と云發り困り居る所御陰様よて助かりと  
云ひいとぞ  
吾々人間よりは數等劣るたる猿ですら主人の命を助け  
たるにあらざや況して万物に長と呼ぼる、人間に生れ  
乍ら主人の恩を忘れてえならぬことなり

以呂波讚

(い) 色葉散ぬる秋の日に  
(は) 蓮の臺にのりの身は  
(ほ) 佛の壽はかりなく  
(と) 常闇の夜も明ぬれば  
(り) 利益する身と成にけり  
(る) 類のあはまる悪世界  
(わ) 巳と地獄をくりゆく  
(よ) 夜見路ハ神もゆき給ふ  
(れ) 蓮臺までハはるかかり

(海) 六道めぐりいそがしく  
(に) 西へ往こそうれしき  
(へ) 隔つ生死のをもとる  
(ち) 散ぬる色葉いろく  
(ぬ) 盗する罪殺す罪  
(を) 教へ三つの道あれど  
(か) 假れ世知れ後世知れ  
(た) 誰を頼て浮ぶべき  
(そ) 祖師の教に忘たがへば



(つ) 罪はほろびて無上覺  
 (ふ) 南無阿彌陀佛の腹の息  
 (む) 無碍の光の中にすみ  
 (あ) 威神力ある大信者  
 (お) 憶念稱名いさましく  
 (や) 闇の無明は破れつゝ  
 (け) 化生の人は智慧すぐれ  
 (こ) 念度彌勒にさきだちて  
 (て) 天神地祇はまもらるゝ  
 (さ) 證の春は陽氣にて

(ぬ) 念佛まうすそのこゑは  
 (ら) 來世をまたぬ正定聚  
 (う) 有漏よて無漏の仲間入  
 (の) 能發一念喜愛心  
 (く) 功徳行者の身にみたり  
 (ま) 實の佛の回向心  
 (ふ) 不退轉より滅度なり  
 (え) 縁なき者も救ふ慈悲  
 (あ) 惡魔鬼神はとそれけり  
 (き) 聞開かれば陰氣かり

(ゆ) 往つ還つ穢土淨土  
 (み) 彌陀の分身釋迦諸佛  
 (え) 圓滿利他の妙法に  
 (も) 聞其名號時いたり  
 (す) 捨たまはぞの御誓願  
 南無阿彌陀佛

(め) 冥途も遊び所ぞや  
 (し) 神明宮も權現も  
 (ひ) 引入たまふ御方便  
 (せ) 攝取心光常照護  
 (京) 京も田舎を一如海  
 (山海里)

天輪教攻撃歌

○一ツトセ ひと度天理に踏み迷ひ先祖代佛檀雨ざら

「此の人非人



○二ツトセ 二ツの月日を借り入て我物顔して矜るやつ

「此の世間見ぞ」

○三ツトセ 身持女は皆な死ぬぞ腹帯毒忌みさ、ぬ故

「此の人殺し」

○四ツトセ 善ひも悪ひも辨へど日の丸扇子て馬鹿踊り

「此の氣違が」

○五ツトセ 命ち危き親人よ薬り飲さど三味大鼓

「此の不孝者」

○六ツトセ 麥米作るに肥料入ぞ天理で取ると嘘をつく

「此の阿房鱈」

○七ツトセ 難病なをすと水吞ませ後ちは腹くて吐げ下し

「此の惡水で」

○八ツトセ 大和乃狸が死んだのに百迄活ると鱧の皮

「此の馬鹿らしい」

○九ツトセ 此處や彼處と駈け廻り人騙して金を取る

「此の盜人が」

○十ツトセ トウく仕舞は十柱神も倒れて家もなし

「此の丸裸か」

盲と聾と聵の火事に遁ひし話



昔一或る國に盲と聾と瘖と三人連れにて常に交つて酒  
を飲み樂しみけるに盲が歌へば瘖が拍子どり聾が舞ひ  
し或る時例の三人が酒宴の最中に近所に火事ありて  
人多く騒ぎ火事よくと云ひければ盲は疾く聞き付け  
逃んとするよ方角知れど瘖は火焰を見付たれども腰ぬ  
けて起つ事からどあはれや聾は火事の方に尻むけて居  
たれば逃んとせど既に三人必死の身とかりしが時に  
或人駆け付て盲に瘖を背せ起せて聾に盲を導かせ瘖は  
背かを聾に方角を指さし見せけるに聾も火事と合點志  
て盲の手を引れ走せ出す盲は方角を知ぬとも足壯健な

れば瘖を背ふて聾に手を引れ辛ふして危難を逃れたり  
と云ふ話が御座ります凡て家内が治まらぬも三人不具  
の火事にあふた様なものです御用心ぬきいませ善い事  
は見習はぬ盲主人の説諫は耳にいらぬ聾仕事ぎらひの  
瘖が惡ふすると世間にあるもので御座ります夫ても矢  
張それをくして家内の者を叱りまはし是程に心を附  
けても家内がねつゝ治まらぬ治まらぬ筈じや妻を妻  
たり子は子たり皆を夫れくの本分を守り人倫五常  
の調子が定まらぬあら甘く治まりませぬ。  
佛敎に和合を本とし互に親切を以て世を渡れば家内



繁昌するぞとあるのは正しく此三人の心を合せて火  
難を免がれたるも全一こととてあります

明治廿五年三月二十日印刷  
明治廿五年三月廿七日出版



編輯者兼  
發行者

島根縣平民

松田甚左衛門

京都市油小路通花屋町上ル  
西若松町三十四番戶

口演者

鎌田淵海

出雲國神門郡  
荒木村百番地

印刷者

瀬戸清次郎

大阪市西區鞆下通一丁目  
四十八番屋敷一成舎

發行所

京都市油小路通  
花屋町上ル

顯道書院



- 大賣場所
- 東京本郷六丁目 香學書院
  - 同日本橋區久松町 開導書院
  - 同京橋區南傳町 日黒十郎支店
  - 同芝區相岩下町 鴻盟社
  - 京都市油小路通北小路上 眞教書院
  - 同東中筋花屋町東入ル 永田長左衛門
  - 同御前通油小路西入ル 山内正次郎
  - 同東六條下珠數屋町 西村九郎右衛門
  - 同東六條中珠數屋町 西村七兵衛
  - 同五條通高倉東入ル 澤田友五郎
  - 同寺町通松原下ル 永田調兵衛
  - 同寺町通五條上ル 藤井住兵衛
  - 同三條通高倉東入ル 出雲寺文次郎
  - 大阪市心齋橋筋一丁目松村九兵衛
  - 同東區安土町四丁目 積善館
  - 同同南本町四丁目 金尾爲七
  - 出雲國神門郡杵築村 顯道書院地方部
  - 但馬國豊岡町 山利安馬
  - 熊本新町通三丁目 長崎次郎
  - 廣島橋本町 末田惣之助
  - 筑前國福岡博多中嶋町積善館支店
  - 越後國三條 樋口小左衛門
  - 神戶多門通三丁目 日京館
  - 鹿兒嶋 吉田幸兵衛
  - 越後長岡 目黒十郎
  - 北海道函館 魁文社
  - 名古屋市門前町 三浦兼助

### 新版並發賣書籍廣告

連枝日野澤師題字 聯學實行師題字  
司教大洲鐵師題字 司教香川德兒師訂正序文

上人御一代聞書略解 定價八錢 郵稅二錢

全五册 佛學上之三卷 發行 定價每卷十五錢 宛郵稅全四錢 宛

近來又ハ理論ニ止リ未ダ我宗内ニ於テ實踐ナリシガ茲ニ該書ハ世

ノ所ニ現行ニシテ佛ノ爲メニ深ク研究ナリシモノナリ

大主少命ナリシガ幸ニ此書ハ佛ノ爲メニ深ク研究ナリシモノナリ

和清九郎實傳 定價金十四錢 郵稅金四錢

此書ハ有名ナル清九郎同行存生中ノ信前信后ニ涉リ一々ノ

行爲ヲ詳載シ平假名流ヲ汲ミ居ラシテ易ク讀ミ易キ書ナリ

勸學針水師校閱 司教鮮明師題字 麻布超海氏撰

四題 蹄 笠

右四題ニ付完全ナル解釋書ノ少ナキハ世人ノ共ニ遺憾ト

校ニ於テ編撰セラレシ書ニシテ其專攻ヲ以テ有名ナル信

體ニシテ一讀ノ下ニ了解ノ苦ムノ患ナク其義趣ハ直ニ開

露シテニテ一讀ノ下ニ了解ノ苦ムノ患ナク其義趣ハ直ニ開

赤松連枝師題字 中西半郎氏著

佛敎大意 定價金五錢 郵稅二錢

此書ハ佛敎ノ深奥ナル教義ヲ淺易ニ説明シテ其義趣ハ直ニ開

答ハ我眞宗ノ教義ニ就テ種々ノ疑問ヲ擧グテ簡易ニ答ヘ

利井明題字 足利義山師著

眞宗俗問 定價金六錢 郵稅二錢

此書ハ眞宗ノ教義ニ就テ種々ノ疑問ヲ擧グテ簡易ニ答ヘ

宗敎對話 定價金八錢 郵稅二錢

此書ハ佛敎ノ教義ニ就テ種々ノ疑問ヲ擧グテ簡易ニ答ヘ



**活用** 此書ハ真宗真俗二論ノ好材料信徒衆ニハ讀嘆談合ノ助縁トナシ  
 此方ニハ真宗真俗二論ノ好材料信徒衆ニハ讀嘆談合ノ助縁トナシ  
 一ベキ頁書ナレハ諸氏早ク一讀ノ下ニ活用ヲ試ミ玉ヘ  
**全第** 一編 三月中出版

**少年修身** 近日常出版 定價十四錢 郵稅二錢  
 少年修身ハ普通ノ修身書ハ讀々出版アリト雖モ佛  
 文化發達スルニ隨ヒ普通ノ修身書ハ讀々出版アリト雖モ佛  
 教主義ノ修身書ハ殆ンド之レナキ如シ是ニ於テ少年修身  
 ノ爲メニ最モ簡短ニ了解シ易ク平假名繪入ニシテ編纂セラ  
 レタル者ナレハ子弟ノ教育ニ志アル諸氏必ス御購求アラソ  
 テナラシメス

**長幼郎傳** 定價六錢 郵稅二錢  
 幼郎居士ハ明治維新ノ際國專ノ爲メ功勞多クカラザリシ  
 ナリシ其後同地方行者トナシテ存生中ノ行爲ハ愛國護法兩全  
 ナリシ實ニ稀ナル厚信ノ行ヲ示シテ存生中ノ行爲ハ愛國護法兩全  
 生ノ素懷ヲ遂ゲラレタリ我宗徒ノ模範トスヘキ實ニ明治兩全  
 ノ實人ナリ亦氏ノ辭世ノ前日恒願トシテ贈ラレタル書翰等  
 ニ至ル迄委々詳載セラレシ前日恒願トシテ贈ラレタル書翰等  
 小泉了齋師序文 日下密門師編輯

**長幼郎實傳** 定價八錢  
 右從來ノ幼郎傳ハ昨夏俄ニ取急キ出版セシ故疎漏ニノ誤認  
 點ナカラスニ於テ訂正増補セラレ勿論紙數ヲ增加シ美本  
 ニ出版セシモノナレハ續々御購讀アラソテテテテテテテテテテ

**佛教少年演說** 定價金三錢  
 近來何國トナク佛教少年會ヲ設ケ少年諸氏互ニ智ヲ開ハシ  
 体ヲ養フトナク佛教少年會ニ於テは唯ニ德育ニ於テハ未ダ之ニ  
 ナル事難クモナク徒ラニ等閑ニ打テ過キタリ是ニ於テ佛教主  
 義ヲ採ミ繪入ニシテ簡短ニ少年諸氏ノ了解シ得ル様ニナシ  
 タル面白キ小冊子ヲ發兌セリ乞フ御一覽アレ

**三帖和讚畧解** 全三冊  
 此書ハ和讚ヲ一首々々平易ニ和訳セラレタルモノニシテ俗  
 語彙ハ必讀セラルベキ頁書ナリ

**正信偈和讚** 定價十八錢 郵稅二錢  
 右ハ此度校正新版板木モ明了ニ紙質製本等ニ至ル迄充分注  
 意致シタレハ旅行或ハ平常稽古用ニハ最モ輕便ナルモノナ  
 レバ諸氏御購求アリタシ

**存覺法語鈔** 二冊 定價金四錢  
 此書ハ先德存覺上人ノ法語ニシテ三輪トテ一ニハ無常輪ニ

**和譯原人論** 三冊 定價金三錢  
 右從來ノ原人論ハ漢譯ニシテ初心ノ俗ニハ殆ンド了解ニ  
 苦マレ實ニ遺憾ナリ是ニ於テ初心ノ俗ニハ殆ンド了解ニ  
 青年會等諸君用ニハ唯リ廉價ナルノミナラズ了解ノ一階梯  
 トモナルベキ頁書ナリ

**因明學全書** 定價六十錢 郵十錢  
 村上專精師著  
 活用上明學全書 定價六十錢 郵十錢  
 訂正補學要領 前編 定價卅五錢 郵四錢  
 同 後編 定價卅五錢 郵四錢

**新佛敎論** 定價三十錢 郵六錢  
 中西牛郎著  
 神代洞通師編輯

**古德法語集** 定價十五錢 郵二錢  
 月荃師述

**源頭論** 定價十六錢 郵四錢  
 修田惠雲師述

**宗說畧** 定價十錢 郵二錢  
 村上專精師著

**佛敎一貫論** 定價卅五錢 郵四錢  
 村上專精師著







因緣信心要義辨全三冊定卅錢 郵四錢	香樹院師述	倍侶三罪錄全二冊定廿五錢 郵四錢	五樂院師述	十八願勸錄全五冊定六十錢 郵八錢	釋津宗師述	大五惡段鼓吹全三冊定廿五錢 郵四錢	全五惡段勸誘錄全三冊定廿錢 郵四錢	十五王修善鈔圖繪全三冊定卅錢 郵六錢	四十八願和訓圖會全五冊定四十錢 郵十錢	香樹院師述	本願成就文講義全二冊定廿四錢 郵四錢	香月院師述	末代無智御文講義全三冊定卅五錢 郵四錢	福田覺師述	三經和讚法話 定廿五錢 郵四錢	米澤智洞師述	說教通俗瓦磔集第一編定廿錢 郵貳錢	同	全 第二編 定廿錢 郵貳錢
全 第三編 定廿三錢 郵貳錢	香月院深動師述	眞宗法話金言錄全五冊第一集 定五十錢 郵四錢	同	全 第二集 全三冊 瀧獵御文之部 定四十五錢 郵六錢	淨滿寺述	全 第三集 全三冊 改每文之部 定卅五錢 郵四錢	香月院深動師述	全 第四集 全三冊 定卅五錢 郵四錢	易行院法海師述	全 第五集 全三冊 定卅五錢 郵四錢	同	全 第六集 全二冊 善導和讚之部 定卅五錢 郵四錢	瀧美契師述	三誓偈宣唱歌錄全二冊定三十錢 郵六錢	庄松ありのよ、記 定五錢 郵貳錢	吉谷覺壽師述	三帖和讚講述 定壹圓卅錢 郵十四錢		

六

吉谷覺壽師著	明治諸宗綱要 定五十錢 郵八錢	瀧美契師述	末代御文說教 定三十錢 郵四錢	香月院師述	一部御文略 解全五冊定四十五錢 郵六錢	法善寺實道師著	眞宗安心精密辨全三冊定卅五錢 郵四錢	大行寺述	說往生要集勸導辨全三冊定五十錢 郵六錢	同	說五段因果實驗錄全五冊定五十錢 郵六錢	大高文進編著	說荊萱發心因緣談全三冊定卅錢 郵四錢	大行寺述	大原問答勸導全三冊定廿五錢 郵四錢	五樂院師述	女人往生勸誘錄全二冊定廿五錢 郵四錢	說譬喻因緣談全三冊定廿五錢 郵四錢	
同	說明治新事實因緣集全二冊定廿錢 郵四錢	香月院師述	白骨御文法話 定廿錢 郵四錢	檀原真福寺述	六字釋勸誘錄 定十四錢 郵貳錢	本法師述	三世因果實驗錄 定十錢 郵貳錢	親鸞上人	御一代記圖繪全二冊定十五錢 郵四錢	上人	御一代記圖繪全二冊定十五錢 郵四錢	小山憲宗師述	唯識大意發揮 定三十錢 郵四錢	勸學善護師述	文類聚鈔聞書 全二冊 定一圓 郵八錢	增補諸乘法數 定廿五錢 郵四錢	增阿彌陀經和訓圖會 定廿二錢 郵四錢	陳善院師述	正信偈五部評林 全一冊 定六十二錢 郵六錢

七



松島善護師述  
**愚禿鈔** 橫超錄全三冊 定六十錢 郵八錢  
**真百通切** 紙全二冊 定廿五錢 郵四錢  
 連如御一代記聞書 定廿二錢 郵四錢  
**標註三部經** 定廿五錢 郵四錢  
 后藤霞城師著  
**正信偈畧釋** 定十六錢 郵四錢  
**禮讚** 偈蒲片紙 定廿五錢 郵四錢  
 妙好人傳全五冊 定廿五錢 郵八錢  
 加藤真壽師述  
**補木佛畫像論** 定廿錢 郵四錢  
**華園文庫** 定十錢 郵四錢  
 北畑淨鏡師著  
**宗教道志留辨** 定十五錢 郵四錢  
 故演暢院法華師著  
**淨土眞宗傳佛心印義** 定廿五錢 郵四錢

松本鏡堂著  
**家庭教育話** 定十錢 郵四錢  
**同修身話** 定十錢 郵四錢  
**同日本歷史話** 定十三錢 郵四錢  
**道德談話集** 定三十錢 郵六錢  
 佛敎新演說 定廿錢 郵六錢  
 鳩翁道話 定廿錢 郵四錢  
 松翁道話 定廿錢 郵四錢  
**六字ノ練言** 定六錢 郵四錢  
**新義古義裁斷實記** 定十七錢 郵二錢  
 米一丸 銘刀光世由來 定十五錢 郵四錢  
 外傳 大洲鐵然油題評 赤松連城師序文  
 小野島千壽代著  
**婦人のかゝみ** 近日出版  
 司教默雷師開 勸學針水師著  
 タタスケタマヘノ考 近日出版

寶之林 八號方合本壹冊 定廿二錢 郵六錢  
 立雪英音編輯  
**佛陀之金言** 定四錢 郵二錢  
 天崎紹蘭著述  
**宗教のはかり** 定三錢 郵二錢  
 少年會勤行集 和製日本紙 定拾錢 郵二錢  
 右ハ少年教會用ニシテ正信偈○念佛○淨土和讃○五帖目  
 御文○改悔文○阿彌陀經○三尊偈○其他偈文等ヲ集メ極  
 メテ簡便ニ且廉價ヲ旨トシ出版セシモノナレバ陸揚師申  
 込アレ

南條文雄師著  
**新年之法話** 一冊三錢 三冊迄稅二錢  
 加藤正嗣師著  
**經世人段略解** 一冊二錢 四冊迄稅二錢  
**一休道歌集** 一冊二錢 五冊迄稅二錢  
 赤松連城師述  
**歡喜之詞** 一冊二錢 五冊迄稅二錢  
**石山法の勳** 一冊壹錢 五冊迄稅二錢

施本適當書類

弘中唯見師述  
**眞理思海** 一冊二錢 五冊迄稅二錢  
**子女教育** 一冊二錢 五冊迄稅二錢  
**みのりのいおり** 一冊壹錢 五冊迄稅二錢  
 弘中唯見師述  
**求めよ哉** 一冊二錢 六冊迄稅二錢  
 圓壽齋清師著  
**行者十種用心** 一冊二錢 六冊迄稅二錢  
 佛敎の大旨 一冊一錢 七冊迄稅二錢  
 明教院師述  
**改悔文法話** 一冊一錢 七冊迄稅二錢  
 大内青齋居士著  
**新年の佛法** 一冊一錢 七冊迄稅二錢  
**信后相續** 一冊壹錢 七冊迄稅二錢  
**法のの** 一冊壹錢 七冊迄稅二錢  
 島野默雷師述  
**法之初年** 一冊一錢 八冊迄稅二錢  
 赤松連城師述  
**新年之吉語** 一冊一錢 八冊迄稅二錢



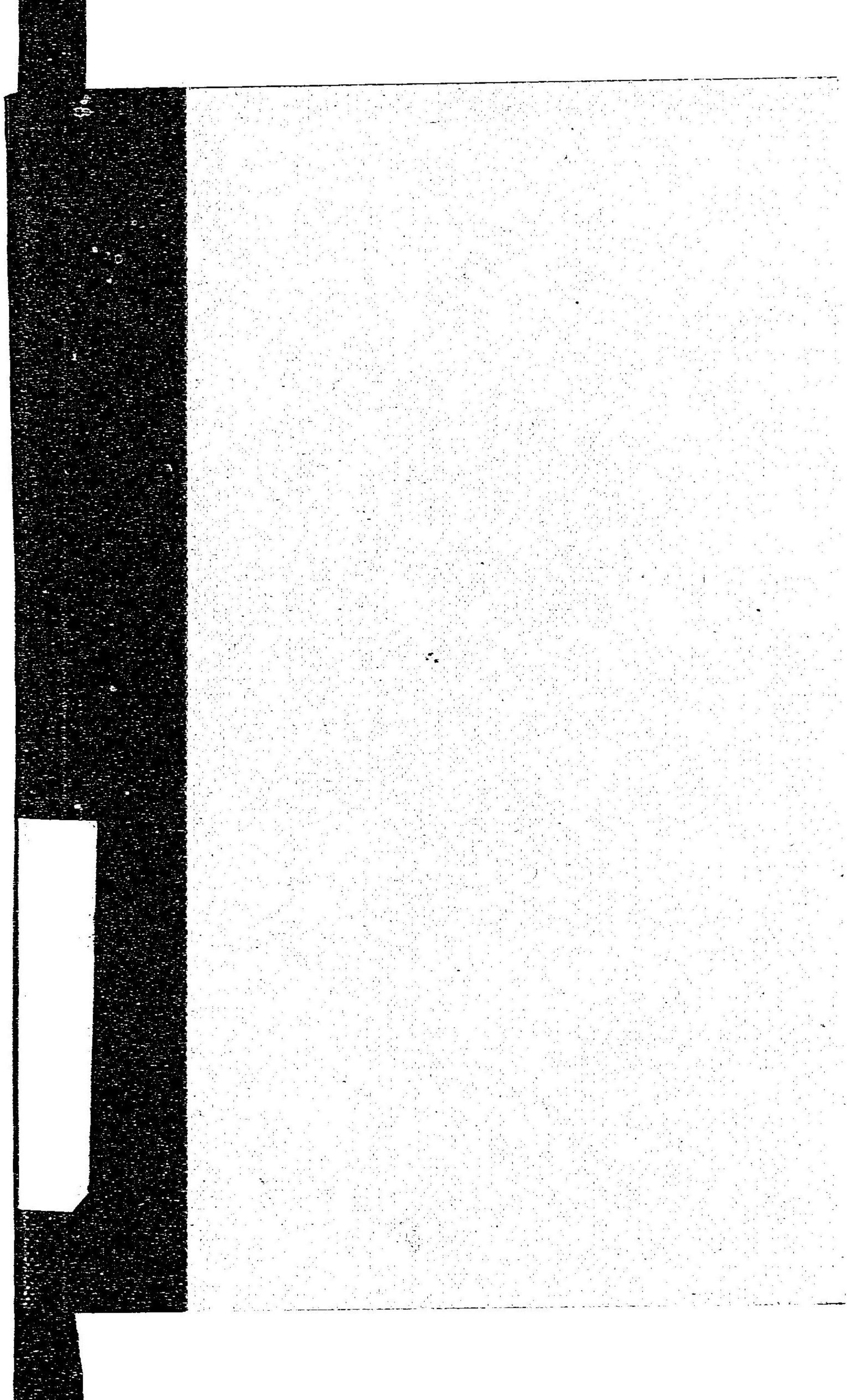
七里恒願師法話	年頭之法話	博多名產之心	安心之間	因果のこぼみ	法のかたみ	坊道のいろは歌	法の道一ば	報恩のこぼみ	七不思議略	辨圓略	縁の近	法の内相	家内相續
一冊一錢 八冊包稅二錢	一冊一錢 八冊包稅二錢	一冊一錢 五厘 八冊包稅二錢	一冊壹錢 八冊包稅二錢	一冊壹錢 八冊包稅二錢	一冊壹錢 八冊包稅二錢	一冊壹錢 八冊包稅二錢	一冊壹錢 八冊包稅二錢	一冊壹錢 八冊包稅二錢	一冊壹錢 八冊包稅二錢	一冊壹錢 八冊包稅二錢	一冊壹錢 八冊包稅二錢	一冊壹錢 八冊包稅二錢	一冊壹錢 八冊包稅二錢

白隱禪師述  
 安はこりた、き 一冊壹錢 八冊包稅二錢  
 孝行粉引歌 一冊一錢 八冊包稅二錢  
 轉法捷徑 一冊壹錢 八冊包稅二錢  
 法護摩釋子 一冊壹錢 八冊包稅二錢  
 一施本類百冊以上ハ定價ヨリ相當ノ割引致シ差上可申候也  
 也追テ三百冊以上御望ノ方ニ限リ前以テ施主姓名通知相成候ハ、末尾へ其旨記載仕候凡テ代價前金ニ非サソ  
 \*御送附ニ及ヒ難ク候  
 一御照會ノ節ハ必ス往復端書或ハ郵券封入之上御申越有之度此段前以テ申上候也  
**注意** 御送金之箇爲換ハ六條郵便局ニ限ル名宛ハ顯道書院會計部宛ニテ郵券代用ハ一割増シノ事  
**注意** 御送便ニテ御送金之箇ハ配達料共御渡濟之事  
 京都市下京區油小路通  
 花屋町上ル  
 顯道書院











特21

353

少年仏教 修身はなし

国立国会図書館

010086-000-6

特21-353

修身はなし(少年仏教)

鎌田 淵海 / 述

M25

AAE-1364

